
ふじみの
No.41
東京農大畜友会

巻頭言

畜産学科長　栗原良雄

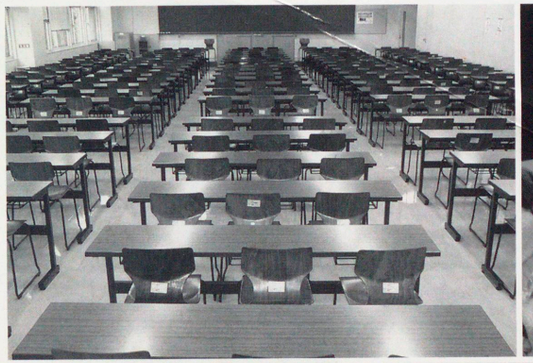
「ふじみの」第41号の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

3月21日に卒業生を送り出し、少々感傷的になっていましたが、桜の咲く4月になり新入生を迎えキャンパスも活気づいてきました。

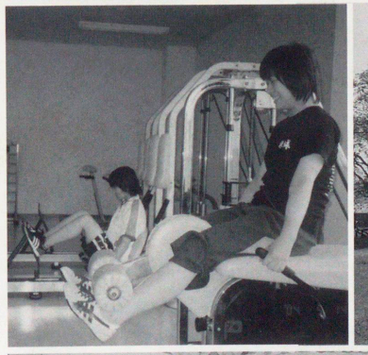
まずは、この3月に卒業された皆さんに対して4年間の勉学を終えられ無事卒業されたことに対して心よりお祝い申しあげます。さらに、これまで支えてくれましたご両親・ご家族をはじめ多くの人たちに報恩感謝するとともに健康に留意し、与えられた環境の下でこれまで蓄えた力を遺憾なく発揮して、その存在を示して下さい。これからの活躍を期待しております。

また、難関を突破して畜産学科にご入学された皆さん、おめでとうございます。みなさんは、今日より畜産を学ぶ我々の仲間入りをしたわけです。心より歓迎いたします。

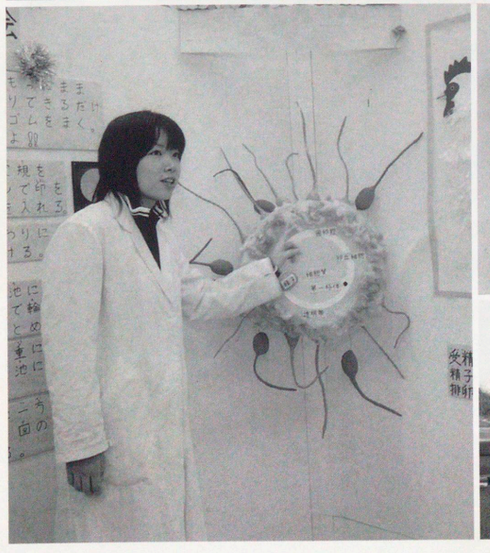
これからは、今までと違いすべてに積極的に取り組み、自分の行動にはすべて責任を持たなければいけ















ません。それから目標を持つこと、さらに、その目標に向かって今日より明日と一歩一歩前進することが大事です。目標のない人生は舵のない船と同じで潮の流れと風まかせでどこに行くかわかりません。

在校生の皆さんも同様で、現在居る環境をふまえて、これまでたてた目標に対してどこまで進んでいるかを確認すると共にこれからの進む道をしっかり確認し、一歩一歩進んでください。そして、卒業されるときには、「農大の畜産学科で学んでよかった」と言えるようにこれからの日々を有意義に過ごして下さい。

今年は酉(鶏)年です。新入生の皆さん、在校生皆さん、卒業生の皆さん、それぞれ立てた目標に向かって大きくはばたいてください。期待しています。

最後になりましたが、本誌を発刊するにあたり寄稿していただいた方々、編集に携わった畜友会の役員の皆様をはじめ関係各位に感謝申し上げます。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　岡部健典

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十一号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告を記載しています。今年は、厚木キャンパスに移転し早くも五年が経ち、「厚木キャンパス」が地域に浸透し、より土台が形成され落ち着いてきた様に思います。今後もまだまだ変化しつつありますが、その中で学生一人一人が自ら感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。ぜひ、隅々まで御覧いただけたら幸いです。

ふじみの　目次

巻頭言　栗原　良雄

ふじみの発刊にあたり　岡部　健典

同窓会だより
同窓会会長あいさつ　伊藤　澄麿

畜産振興会
東京農業大学畜産振興会　便り　渡邉　誠喜

研究室だより
家畜繁殖学研究室
家畜飼養学研究室
家畜学研究室
畜産物利用学研究室
家畜育種学研究室
家畜生理学研究室
家畜衛生学研究室
野生動物学研究室

畜友会だより
平成十六年度畜友会事業報告
平成十五年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成十六年度畜友会予算
特別会計予算
平成十六年度畜友会役員
第五回厚木キャンパス収穫祭・
第一一三回体育祭事業報告及び結果報告
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第五回厚木キャンパス収穫祭・
第一一三回体育祭各部門委員長より
Priceless　統一本部委員長　3年　岡部　健典
人×人　特別企画委員長　3年　五島　惟道
宣伝隊！　宣伝隊隊長　3年　吉田　佑美
秋の幻　神輿隊長　3年　三浦　隆雄
畜産色　体育祭委員長　3年　川口　桂介

家畜学研究室の閉室について　栗原　良雄

家畜学研究室の思い出
ひとりの終夜体験談☆　小林　美穂
後輩のいない研究室　貝瀬　貴昭
祝☆家畜研歌謡祭5連覇☆☆☆☆☆　石田　貴之
廃用家畜、ステージへ・・・!!　東内原聖子
2年間　峯村　祐太

退職にあたり
僕の牛飼い体験　大谷　忠

ふじみの寄稿原稿
動物関連学ではない、こだわりの畜産学を　祐森　誠司
家畜衛生の仕事に携わった21年間　村上　覚史
農大に来て　岩田　尚孝

集う学友
畜産学科での日々　4年　矢野　則維
一期一会　3年　中西祐美子
世界学生サミット(International Student Summit)　2年　矢野　見佳
一年を振り返って　1年　割野孝太郎

みんな、ありがとう!!　櫓装飾委員長　3年　小山　智美
☆装飾委員長☆　装飾委員長　3年　山口　奈穂
『家畜苑』ですごした日々　家畜苑委員長　3年　大原　賢二

編集後記　3年　横山　祥子

同窓会だより



同窓会会長あいさつ

畜産学科同窓会
会長　伊藤澄麿

昭和二十四年に設置された畜産学科は今年で五十六年の月日を経ることになりました。これまでの間、昭和二十八年の第一期生の卒業以来、延べ七、〇四三名の同窓生を世に送り出し、それぞれが国内、外を問わず畜産業ならびに関連産業において活躍されています。

本会は、昭和六十三年に畜産学科創立四十周年を迎えた折り、会員相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に寄与することを目的に設立されました。以来、会員の皆様のご協力により先のような事業を着々と展開しております。

一、畜産学科への援助
二、新入会員および卒業祝賀会への援助
三、会員名簿の追補版の発行
四、同窓会報の発行
五、代議員会および親睦会の開催
六、役員会および常任幹事会の開催

昨年度は、二一八名の同窓生が誕生し、追補版の会員名簿を発行しました。また、三月二十一日に行われた卒業式において安蔵瑛子君に第三号の同窓会優秀卒業論文賞の表彰、代議員会の開催、講演会（瀧川、片山、川口、滝沢の四氏による食肉をめぐる最近の情勢について）などの事業を行いました。卒業祝賀会においては卒業式終了後の学科・畜友会・同窓会の共同主催による卒業祝賀会が執り行われ、長い時間教職員、友人達と談笑され満足されたことと思います。

本誌の発行は平成十六年度の卒業式当日と思います、卒業生の皆さんご卒業誠におめでとうございます。本日から同窓会会員となられる訳ですから、本学科で学ばれたことに胸を張り、そして共に過ごした仲間、先輩、後輩と生涯連絡を密に取り合いながら各界でご活躍戴きたいと思います。そのケルンとして同窓会をご活用ください。

準会員である新入生を含めた在校生諸君は、生涯の友、恩師に恵まれるよう本会を活用され、恩恵を受けていただくと共に文武両道の精神で勉学、課外活動に活躍され、悔いのない学生生活を通じて幅広い人格を形成されますことを祈念いたします。

畜産振興会



東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　渡邉誠喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、早十四年が経ち本誌に便りを執筆する時期となりました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されました。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとなっております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二～四年次生の各学年から一名ずつ計三名、姉妹校留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部支給、優秀卒業論文賞を毎年一名、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対する表彰を実施しております。特に学生による論文発表や学会での口頭発表は年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また近年、社会の経済不況により学費納入が困難な学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第四期の学科学生ならびに第二期の大学院生（博士前期課程）が卒業いたします。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみと云う状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑にも参加するなど学生に親しまれております。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本

年度で七号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は振興会会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことによります。設立後、逐次拡大してきた事業を遂行するための資産は、

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
二　賛助会員会費
三　一般寄付金
四　その他の収入

によって賄われておりますが、充実した事業の展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたし、振興会便りといたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私たち家畜繁殖学研究室は、門司恭典教授をはじめ、桑山岳人助教授、佐藤光夫講師、岩田尚孝講師のご指導のもと、大学院生4名、4年生29名、3年生35名で構成され、日々研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜、家禽、また実験動物などの繁殖生理について研究しています。具体的には、

・家畜の人工授精、胚移植、体外受精に関する研究
・家禽における繁殖行動中のホルモンに関する研究
・環境ホルモンの影響についての研究
・精子、卵子、胚の凍結保存に関する研究

などのテーマを定め、研究を進めています。最終目標は人間社会に対する有用価値を考慮に入れた家畜生産の技術として確立することです。

日常の活動内容は、3年生は繁殖学の基本的な知識、実験方法や技術を身に付けるとともに、シバヤギ、ミニチュアブタ、家禽（岐阜地鶏、ニホンウズラ、セイロン野鶏等）をそれぞれの班に分かれて日常の飼育管理を行い、大学院生や4年生の研究や実験の補助をしています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会や大掃除、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、スポーツ大会、卒業生送別会などがあります。

室員同士とても仲の良いあたたかい研究室です。また、先生方や大学院生とも会話が多く、各々が目標を持ち、充実した研究生活を送っています。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
赤間奈緒美	ミニチュアブタのライディッヒ細胞の培養に関する研究	岩田 門司
浅野　陽子	ニワトリ精液の液状保存に関する研究	桑山 門司
熱田　美幸	黒毛和種の分娩予知と膣内粘液の電気抵抗値とその関係	門司 佐藤
飯田　真希	岐阜地鶏の産卵期及び抱卵期における血漿コルチコステロン濃度について	桑山 門司
飯塚さやか	ブタ精子の液状保存法についての検討	門司 岩田
石井　淳子	赤色野鶏と岐阜地鶏の繁殖行動について	桑山 門司
伊藤　麻里	ブタ卵子の体外における成熟能力と発生能力の関係について	岩田 門司

遠藤　圭子　FSH製剤によるシバヤギの過剰排卵誘起方法の検討　岩田　門司

大塚有希子　雄ブタの体外受精時における精子処理が正常受精に及ぼす影響　岩田　門司

小久保崇正　セイロン野鶏の復元に関する研究　桑山　門司

後藤　隼人　精液の子宮角深部注入がブタの受胎性及び産子数に及ぼす影響　門司　岩田

佐々木賀代　ガラス化凍結を用いたウシ・ブタ卵子の凍結保存がその後の発生能に及ぼす影響　岩田　門司

佐藤　千陽　お灸が肉牛の発情回帰に及ぼす影響　門司　佐藤

佐藤　勉　乳牛における分娩前後の飼養管理が発情回帰および受胎におよぼす影響　門司　佐藤

菅生　崇夫　ウズラ繊維芽細胞の培養法の検討　桑山　岩田

高城明日香　ブタ発育途上卵母細胞の体外発育培養に関する研究　岩田　門司

中山　穣　ミニチュアブタにおけるhcGおよびPGF2a投与による発情同期化法の検討　桑山

長島　優　雄ニホンウズラに対する連続採血が血漿テストステロンおよびコルチコステロン濃度に及ぼす影響　桑山　門司

林　晋平　発情同期化させたミニチュアブタにおける繁殖成績について　門司　桑山

福田　明代　早期離乳がミニチュア母豚の繁殖性および子豚の発育に及ぼす影響　門司　桑山

松原　薫　卵黄トリス糖液への各種添加物がシバヤギ精子の凍結・融解後の精子生存性に及ぼす影響　門司　岩田

宮本絵理子　ミニチュアブタにおけるホルモン製剤投与による発情同期化　門司　桑山

森　寿美　乳牛の発情周期中における乳汁の電気伝導度および血中性ステロイドホルモンの変動　門司　佐藤

矢野　則雄　老齢去勢ニホンウズラのクロアカ腺機能に対するテストステロンの影響　桑山　門司

山下　朋哉　シバヤギへの抗酸化剤の投与が繁殖機能に及ぼす影響　岩田　門司

若菜　洋子　ウズラにおける窓明け法での胚盤葉キメラ作出の検討　桑山　岩田

大久保美希　鈍製発情および微弱発情を示すミニチュアブタへのホルモン剤投与効果について　門司　桑山

北川　真美　卵胞膜細胞と顆粒層細胞との共培養がブタ卵子の体外成熟およびその後の発生能に与える影響　岩田　門司

高橋佐恵子　ミニチュアブタにおけるDES投与が精液性状および内分泌に及ぼす影響　門司　岩田

家畜飼養学研究室

生産物を提供してくれる家畜、共に生活するコンパニオンアニマル、同じ水・空気を分かち合いつつも滅多に顔を会わすことがない野生動物、どの動物も生きていく上で欠かすことのできないものが、飼料・（食物）です。本研究室は動物が生きていくために、どんな飼料を（飼料学）どれくらい（動物栄養学）どうやって（家畜管理学）与えるかを常に追求しています。これらの妥当性を判断する知識として各動物の行動の意味（家畜行動学）を理解し、さらには与えた飼料の最終形態（糞尿）（畜産環境保全論）についても考えねばなりません。これら全ての知識を応用した学問が家畜飼養学です。

研究は、栗原良雄教授、祐森誠司助教授、池田周平助教授の指導の下、進めており、成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本ペット栄養学会等の大会に毎年発表されています。研究室の活動は、春の富士農場での専攻実習と新室員歓迎会に始まり、夏の家畜管理実習（学外）、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加（模擬店:カレーうどん、文化学術展:おいしい豚肉を作るには）、冬の畜産関連諸施設の見学を兼ねた研修旅行、卒論発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と盛り沢山です。各活動を通して、室員の団結を深め、それぞれが、目的意識を持って有意義な学生生活を送っています。

研究室を第二の家のように楽しく過ごし、先生方の指導も厳しい時もありますが、学生の相談に親密に応えてくだ

ださり、厳しさの中に優しさを感じます。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
東　修平	ラットの盲腸摘出が体成分に及ぼす影響	祐森 池田
阿部なつみ	成兎の基礎飼料ならびに濃厚飼料の消化率の検討 —食糞行動を阻止しない場合—	栗原 祐森
安藤美乃里	中雛および大雛における熱発生量の日内変動について	栗原 祐森
伊藤　絵美	豚の肥育後期における低タン白質飼料の制限給与が消化率に及ぼす影響	池田 祐森
伊藤　可苗	光環境（波長）が産卵鶏の産卵に及ぼす影響について　—56週齢以降—	栗原 祐森
江坂　崇	ラットの盲腸摘出がミネラルの蓄積に及ぼす影響	祐森 池田
圓藤　大輔	軽種馬用敷ワラの水洗による窒素流出量について	栗原 祐森
長縄　透	軽種馬における糞尿の混合割合とアンモニアガス揮散量の関係	祐森 栗原
贄田　智哉	豚の肥育後期における低タン白質飼料の制限給与が経済性に及ぼす影響	池田 祐森
林　正文	乳牛へのルーメン保護アミノ酸製剤添加が泌乳に及ぼす影響	池田 佐藤
細野　泰央	豚の肥育後期における低タン白質飼料の制限給与が成長に及ぼす影響	池田 祐森
前田　桃子	成兎の基礎飼料ならびに粗飼料の消化率の検討 —食糞行動を阻止した場合—	栗原 祐森
松岡　大輔	ビタミンA欠如飼料で飼育した産卵鶏へのビタミンA含有飼料の給与が産卵に及ぼす影響	栗原 池田
松本　理祐	肉用牛の早期離乳が母牛および子牛の唾液中コルチゾール濃度に及ぼす影響	池田 佐藤
宮田　哲幸	豚の肥育後期における低タン白質飼料の制限給与が肉質に及ぼす影響	池田 祐森
茂木　浩二	異なる飼料を給与した産卵鶏へのビタミンA欠如飼料給与が産卵に及ぼす影響	栗原 池田
岡田　紘明	い草を用いた堆肥調整時のアンモニアガス発生について	祐森 池田
大隅　貴士	盲腸摘出ラットへの制限給与が成長に及ぼす影響について	祐森 池田
加嶋　京子	ラットにおけるコバルトとビタミンB_{12}の関係について	池田 祐森
清田　正博	光環境（波長）が産卵鶏の卵質に及ぼす影響について　—56週齢以降—	栗原 祐森
石澤　友祐	軽種馬における糞尿混合時の水素イオン濃度(pH)とアンモニアガス揮散量の関係	祐森 栗原
杉山　匠悟	ビタミンA欠如飼料で飼育した産卵鶏へのビタミンA含有飼料の給与が血清および卵黄中のレチノール量に及ぼす影響	栗原 池田
瀬角　淳	堆肥調製におけるい草の利用について	池田 祐森
高橋こず恵	成兎の基礎飼料ならびに粗飼料の消化率の検討 —食糞行動を阻止しない場合—	栗原 祐森
筒井はるか	肉用牛の早期離乳が母牛および子牛の行動と生理値に及ぼす影響について	池田 佐藤
藍郷　学	乳牛へのルーメン保護アミノ酸製剤添加が排泄物中窒素に及ぼす影響	祐森 佐藤
武山　純子	新設放牧地内の肉用繁殖牛の行動について	祐森 佐藤
松本　桂子	成兎の基礎飼料ならびに濃厚飼料の消化率の検討 —食糞行動を阻止した場合—	栗原 祐森
林　弘枝	アイガモの飼料について	栗原

家畜学研究室

本研究室は、大谷忠教授をはじめ、荻原國威講師、西脇充講師の御指導のもと、四年次生二十八名、三年次生二十九名、計五十七名の室員で日々の研究活動を行っています。

本研究室では、学内外の実習・調査を通し、家畜生産現場での現在の問題点や疑問点について各自が考察を行い、研究を行っています。研究対象は家畜・家禽・堆肥・伴侶動物など、多岐にわたっております。

現在の主な研究課題は

・ダチョウの孵卵・孵化・育雛・行動等に関する研究
・乳用緬羊を用いた季節外繁殖に関する研究
・有機物資源の堆肥化と利用に関する研究
・伴侶動物に関する調査・研究

などを行っております。

その他に、年間行事として、新入生歓迎会・研修旅行・納会があります。又、各研究班によるゼミも行っております。

今年で設立七年目を迎え、今後も各人の自主性を尊重するとともに、研究室全体の協調性も培ってゆけるよう全員で精進してまいります。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	
		指導教員
石田　貴之	乳用緬羊フライスランド種の被毛の形態に関する研究	大谷
伊藤　舞	緬羊堆肥が飼料稲の生育と品質に及ぼす影響	大谷
井村　祥子	休耕田を利用した家畜飼料米栽培の低コスト化に関する研究—定植時の株間の差が米収量に及ぼす影響—	大谷
大塚　恵	動物愛護管理法の認知度並びに今後の啓蒙策	西脇
小澤　恵	ダチョウの飼育羽数の違いによる成長への影響	西脇
小山　幸子	ダチョウヒナの飼料に関する研究—桑ペレットの嗜好性について—	西脇
貝瀬　貴昭	ダチョウの衛生管理に関する研究—連続育雛による細菌の発生について—	西脇
工藤　実緒	我が国における伴侶動物の宿泊施設の現状と今後の展望	西脇
小島　大輔	緬羊に対する飼料米の嗜好性と消化率	大谷

小林　美穂	肥育豚への飼料米給与が肉質に及ぼす影響	大谷
笹貫　志保	鶏の品種間における肉色の差異に関する検討	西脇
佐藤　宣子	パプリカ抽出処理物入り混合飼料給与によるブロイラーの肉色への影響	西脇
副島慎太郎	馬糞堆肥による飼料稲の生育と収量に及ぼす影響	大谷
高嶋　雅美	我が国におけるダチョウ産業の現状と今後の展望	西脇
寺澤　久孝	飼料稲の低コスト栽培に関する研究—堆肥多量施用による多収ならびに除草効果について—	大谷
栃久保　慧	我が国における競走馬の引退後の現状と今後の課題	西脇
内藤　良枝	鶏卵の無洗卵と洗卵による卵質への影響	西脇
長島　啓史	東京農業大学富士畜産農場における肥育牛の市場評価	西脇
野澤　真里	廃棄物を副資材とした堆肥調製に関する研究	大谷
野原　蓉子	ダチョウヒナの餌付けに関する研究	西脇
蓮見　智子	吊り下げ式給水器の子豚への利用に関する検討	西脇
林　幸江	ダチョウのニューカッスル病ワクチネーションプログラムに関する研究	西脇
東内原聖子	沖縄県八重山地域における主要暖地型牧草パンゴラグラスの生産性	大谷
峯村　祐太	長野県上田小県地域の小学校における動物飼育に対する意識	西脇
山川　将弘	我が国における山地酪農の現状と展望	西脇
温　劭琳	北海道檜山支庁における瀬棚の複合経営の現状	大谷
米田　大	ふれあい度合いおよび方法が子緬羊の馴致におよぼす影響	大谷
井上　恵介	羊の色彩判別能力に関する研究	大谷
岡村　麻弥	桑の葉給与がダチョウの血液性状および肉質に及ぼす研究	西脇

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の松岡昭喜教授をはじめ、渡邉乾二嘱託教授、古川徳教授のご指導のもとに大学4年次生26名、3年次生27名の室員で構成されており、それぞれに活発な活動を行っております。

具体的には、乳、肉、卵中に含まれる各成分の化学的、物理的特質ならびに栄養、生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究し、食品成分の機能性や保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発等に取り組んでおります。

年間の主な活動としては、週1回の食品に関するゼミナール、新入生歓迎会、乳酸飲料、ソーセージ製造実習、ハム、スモークチキンの収穫祭での販売、研修旅行、卒業論文発表会等があります。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
阿部　麗	旅客機のIT化における乗客サービスについて	杉本
新井　愛	卵成分の乳酸菌の増殖作用に関する研究	渡邊
猪熊　涼子	卵白リゾチームの乳酸菌増殖に及ぼす影響	渡邊
大竹　康子	豚肝臓を原料とする発酵肉製品の開発	松岡
岡　佑輔	発酵バナナを用いる乳飲料の開発	古川
荻津　智	飼料用玄米の給与が肥育豚の肉質に及ぼす影響	松岡
尾茂田明菜	免疫賦活作用を有する卵白ペプチドの同定	渡邊
勝俣　宏典	緑茶抽出物添加による発酵豆乳の癌転移抑制効果	古川
加藤木陽子	乳タンパク質加水分解のプロリルエンドペプチダーゼ阻害効果	古川
黒川　宗	アレルゲン低減化発酵卵白食品の製造に関する研究	渡邊
猿木　雄介	大豆タンパク質加水分解の摂取がマウスの短期記憶に及ぼす影響	古川
白澤　天児	酵母を接種した発酵ソーセージの諸性質	松岡
高野　修一	発酵による黒豆々乳の抗酸化態の変化	古川
竹内　恵美	発酵乳の糖尿病疾患モデルマウスに対する効果	古川

竹田　昌代	おからを含む豆乳ヨーグルト製造法の検討	古川
田中　桂子	ダチョウ肉を主原料としたスモークドソーセージの品質	松岡
田村　憲一	ポークソーセージの抗酸化性並びに抗菌性に及ぼすニンニクエキスの添加効果	松岡
中西　朋晃	生蘇類似食品（シャルトス様食品）の製造法とその成分的特徴	古川
中屋加奈子	免疫細胞に及ぼす初乳タンパク質分解産物の影響	古川
仲山　有美	カマンベールチーズ形状が熟成に及ぼす影響	古川
新田　和	卵白ペプチドによる鶏卵アレルギー免疫寛容に関する研究	渡邊
平塚　聡子	加熱脱オボムコイド卵白ゲル化物の鶏卵アレルギー免疫寛容誘導に関する研究	渡邊
平山　恵子	豆乳を用いたフローズンヨーグルト貯蔵中における乳酸菌の消長	古川
牧　武志	ケフィールを接種した発酵ソーセージの諸性質	松岡
矢口祐之助	馬肉添加ソーセージの品質改善に関する研究	松岡
山崎　涼子	ホエータンパク質加水分解物の摂取がマウスの短期記憶に及ぼす影響	古川
吉田久美子	発色剤無添加で試作した発酵ソーセージの赤色化と細菌学的性状	松岡

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、細胞遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、天野卓教授をはじめ、花田博文教授、野村こう講師、高橋幸水副手の指導の下、大学院生8名、大学院研究生1名、4年生28名、3年生33名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては細胞遺伝学的研究、血液蛋白型支配遺伝子情報・様々なDNA遺伝子情報を用い家畜および家禽の系統遺伝学的研究、品種分化に関する研究などが行われています。

研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収穫際への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例室員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
新井　誠	ミトコンドリアDNAおよびSRY遺伝子情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	天野
飯島　隆介	ヤクのミトコンドリアDNA配列の特性	野村 天野
池村　曜子	飼育下におけるキツネザルの生態学的研究	野村 天野
石井　一成	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
石川　正隆	マウスおよび家畜胚の染色体分析手法の検討	野村 花田
岡部　千里	血液蛋白型支配遺伝子によるウシの系統遺伝学的研究	野村 天野
木村　信之	体外受精および核移植により作出された豚の細胞遺伝学的研究	野村 花田
小林　恭子	体細胞クローン牛の細胞遺伝学的研究	野村 花田
佐久間健治	臓器移植拒絶反応抑制方法の確立に関する基礎的研究	野村 天野
中川　公太	頭骨画像情報解析による家鶏の品種分化に関する研究	野村 天野

永井　茜	マウス間葉系幹細胞の分化制御に関わる遺伝子の同定とその発現パターンの解析	野村 天野
羽鳥　敬祐	ミトコンドリアDNA D-loop領域情報によるウシの系統遺伝学的研究	野村 花田
藤岡　裕子	ミトコンドリアDNA情報によるニワトリの系統遺伝学的研究	野村 天野
藤沼　和秀	ミトコンドリアDNA蛋白質コード領域に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	野村 天野
藤本　泰朗	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村 花田
藤谷　太郎	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
布施　幸太	頭骨画像情報解析による家鶏の品種分化に関する研究	野村 天野
古畑　晶子	体細胞クローン牛の細胞遺伝学的研究	野村 花田
星野　豊	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
松原　慎吾	マイクロサテライトマーカーによるニワトリの系統遺伝学的研究	野村 天野
村山　奈緒	羽装の紫外スペクトル比較に基づく野鶏と家鶏の分類に関する研究	野村 天野
森　裕一	ミトコンドリアDNA D-loop領域情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	野村 天野
山田　奈央	肝実質細胞の研究資源化をめざした保存・培養技術の基礎的検討	野村 天野
山本　健二	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村 花田
良川　郁恵	ガヤールのミトコンドリアDNA配列の特性	野村 花田
若宮久美子	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村 花田
小島えり子	SRY情報によるウシの系統遺伝学的研究	野村 花田
白川　千聖	血液蛋白型支配遺伝子によるスイギュウの系統遺伝学的研究	野村 天野

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師のご指導のもと、大学院生8名、学部4年次生27名、学部3年次生33名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究、③ウシに関する研究、④その他の動物に関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションの変化による血液性状の変動、赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究などをしています。②においては、抗原に対する抗体産生能・アポトーシス・モノクローナル抗体といった免疫学の基礎となる研究、組織適合性複合体（ＭＨＣ）の分子遺伝学的・免疫学的解析、ＴＬＲ遺伝子の解析、ＨＳＰ70遺伝子の解析、ニホンウズラとニワトリの属間雑種に関する研究を行っています。③においては、ビタミンＡ代謝における諸々の現象に関する研究、不死化細胞の染色体解析などを行っています。④においては、マメジカ及びアライグマのＤＮＡ多型に関する研究が精力的に行われています。

本研究室における日々の活動を紹介すると、3年次には生理学に関する基礎的な実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行うと共に、実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文研究の補助として協力しています。4年次には前述した研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っています。院生は、自分の学位論文のテーマに対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、週1回のゼミナール等があります。

なお、平成16年度の卒業論文題目は以下の通りです。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
石毛太一郎	ニホンウズラにおけるデフェンシン遺伝子の解析	半澤
大久保響子	ニホンウズラにおけるＬＰＳ投与量が免疫応答に及ぼす影響	半澤 原
甲斐　孝規	高温環境下におけるニホンウズラの組織学的解析	半澤 吉田
藤山　俊	ウマ赤血球系幹細胞に発現するSLC7A10及びSLC3A2の塩基配列の解析	半澤
菊地　亜美	In vivoにおけるニホンウズラHSP70の熱ショック応答に関する基礎的解析	半澤
岸本美由紀	ニホンウズラにおけるペプチドグリカン（ＰＧ）が免疫応答に及ぼす影響	半澤 原
小林　智美	ニホンウズラにおけるＭＨＣ領域のＤＮＡ多型と発生能力との関係	半澤
小林ひと枝	ＰＧおよびＬＰＳ免疫がニホンウズラの腸内細菌叢に及ぼす影響	半澤 原
齋藤　雅子	ニホンウズラHEP21遺伝子の多型解析	半澤
酒井　峰平	ウマ赤血球系幹細胞に発現するSLC12A4およびアルギナーゼ遺伝子の塩基配列の解析	半澤
佐藤　真也	In vitroにおけるニホンウズラHSP70の熱ショック応答に関する基礎的解析	半澤
鈴木　進悟	ニホンウズラＭＨＣクラスⅡβ鎖主働遺伝子座およびTAP2遺伝子座の多型解析	半澤
鈴木　達也	ニホンウズラにおける正常および免疫応答時のIgM濃度の解析	半澤 原
鈴木千絵子	ニホンウズラのTLR2遺伝子の解析	半澤 原
高田　晋	ニホンウズラの正常血漿IgG濃度高・低個体群におけるＬＰＳおよびＰＧ免疫による血漿中タンパク質の変動	半澤 原
竹尾絵李子	ニホンウズラCD8に対する特異的ポリクローナル抗体及びその陽性細胞の解析	半澤 原
早武真理子	マメジカのマイクロサテライトＤＮＡを利用した多型解析	半澤
藤嶋　靖之	ニホンウズラHSP70遺伝子の構造解析	半澤
前川　純一	ビタミンＡ添加乳の給与が仔牛の血中ＲＢＰとＴＴＲ濃度に及ぼす影響	半澤 吉田
溝口　淳	ニホンウズラＢ細胞表面抗原に対するモノクローナル抗体の作製	半澤 原
山地佳代子	ニホンウズラＴ細胞表面抗原に対するモノクローナル抗体の作製	半澤 原
山田すみれ	神奈川県下に生息する帰化アライグマの地域的多型性	半澤
吉田　喬	ニホンウズラの発生ステージにおけるアポトーシスの変化 ―発生停止胚と正常胚との比較―	半澤

家畜衛生学研究室

わが家畜衛生学研究室は、室長の渡邊忠男教授をはじめ、井上教授、村上助教授のご指導のもと、大学院生四名、研究生一名、四年生二十九名、三年生三十五名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病に対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種類の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生でありましたが、最近では、「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（コンパニオンアニマル）の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では、模擬店で「しし汁」を出店し、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会等があり、室員の団結を深め、各々が目標意識を持って有意義な研究および、研究室活動を行っています。

なお、平成十六年度の卒業論文の題目は次の通りです。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
若井　翔	乗用馬における赤血球の生理的諸性状と比重の年間変動	半澤
粕谷　妙子	牛の甲状腺、肝臓および腎臓における RBPとTTRの免疫組織学的解析	半澤 吉田
車谷　泰子	ビタミンA添加乳の給与が仔牛の血中レチノール・レチニールパルミテートおよびβカロテン濃度におよぼす影響	半澤 吉田
小野寺修子	口腔内洗浄剤の猫口腔内細菌に対する影響	渡邊 村上
北島　歩	馬のフレグモーネ症に関する文献的考察	渡邊
木村　暢臣	犬の歯肉炎に対する処置法の検討	渡邊 村上
神志那志保	隔離動物舎における細菌相の検討	渡邊
佐久間　雅	豚舎内細菌相に対する消毒剤の効果	渡邊 村上
斉藤　大気	公共施設の衛生学的考察	渡邊 村上
獅子内賢人	ブロイラー農場における内部寄生虫浸潤調査	渡邊 西脇
菅原　佳宏	アミノ酸の飲水投与が犬に及ぼす影響	渡邊 村上
須川　慶子	豚体より隔離されたブドウ球菌の薬剤感受性について	渡邊 村上
玉岡　崇	斃死鶏の細菌学的検索	渡邊 西脇
飯澤　憲一	豚サーコウイルスに対する消毒効果について	渡邊 村上
飯室　真美	実習農場飼養鶏のサルモネラ浸潤調査	渡邊 西脇
五十嵐智紀	犬の排糞行動が飼養管理に及ぼす影響	渡邊 村上
磯田　明里	鶉糞より検出されたコクシジウムについて	渡邊 村上
伊藤　理恵	EDS-76ウイルスの各種細胞における増殖性について	渡邊
稲川　達也	山羊の体表に認められる外部寄生虫について	渡邊
伊従　留南	丹沢に生息するニホンザルの糞便中内部寄生虫卵について	渡邊 安藤
梅村　明花	愛玩動物としてのミニチュア豚の初期訓練について	渡邊 村上
浦田　哲平	外部寄生虫に対する駆除法の検討	渡邊
大村　賢治	キャンパス内飼育反芻類の内部寄生虫に	渡邊

野生動物学研究室

本研究室は土屋教授、安藤助教授、小川助教授の指導のもと、室員がそれぞれ目的を持って、研究活動を行っている。

我々は家畜の祖先である野生動物の分類や行動、生態学的な研究を行うため、フィールド調査（サンプルの捕獲や生態行動観察等）を行っている。また、研究室で動物を飼育し、繁殖、成長などに関する研究や、細胞遺伝学的および分子遺伝学的な研究を行っている。

研究の対象は、モグラやコウモリ、ヤマネ、モモンガ、ムササビ、ネズミ類などの小型哺乳類、ネコ、テン、アナグマなどの中型哺乳類、シカ、シフゾウ、アジアゾウ、ニホンザル、クジラなどの大型哺乳類である。また、近年日本の生態系に影響を及ぼしている外来種のアライグマやハリネズミの研究、他にもキジ類やサギ類などの鳥類の生殖や生態といった幅広い研究を行っている。

これらの研究を通して、生物資源として重要な野生動物の種の保存、および特性の解明を目指している。

平成十六年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
大石菜見子	ドワーフハムスター（*Phodopus*）類の生化学的標識遺伝子の多型調査	土屋
玉置 菜美	富士畜産農場飼養牛の糞便中寄生虫卵について	渡邊
千葉 洋平	一級河川における流域による水質の差異について	渡邊 村上
中島 一彦	豚糞より検出されたコクシジウムについて	渡邊 村上
中村理恵子	給与飼料の差異が豚糞の臭気に及ぼす影響	渡邊 村上
西田 愛	公園利用犬に対する公衆衛生学的検討	渡邊 村上
山田 淳志	犬の外耳道から得られた酵母様菌について	渡邊 村上
山田芽生子	民間施設における飼育猫の内部寄生虫卵調査	渡邊 村上
吉田 博之	ピロリ菌接種が豚の血液性状に及ぼす影響	渡邊 村上
鈴木 萌子	牧場生産乳の衛生学的考察	渡邊 村上
大久保慶信	丹沢山系における樹上性哺乳類の巣箱選択性とその生態 ～主にニホンモモンガについて～	安藤
河西 久美	下顎骨多変量解析に基づく日本産ビロードネズミ類の分類の試み	土屋
樫原 祐輔	箱根東斜面におけるアズマモグラとコモグラの分布境界調査	土屋
呉 理名	タイ国におけるアジアゾウ(*Elephas maximus*)の現状についての事例研究（ケーススタディー）	安藤
小島 せり	クジラ類のストランディングの原因について	土屋
近藤 美都	厚木キャンパス周辺に生息する中型哺乳類の移動における側溝の役割	安藤
佐々木 文	野生ハツカネズミ(*Mus musculus*)における生化学的標識遺伝子の多型解析	土屋
下四日市悠	アズマモグラ(*Mogera imaizumi*)の地下利用部位の季節変化	土屋
新間 由美	南米産齧歯類8種の分子系統学的解析	土屋
鈴木 岳	ゴールデンハムスターの近交系および雑交系を用いた下顎骨多変量解析の検討	土屋
田中 幸	秦野戸川公園周辺におけるニホンジカの出現頻度 —農業被害に対する意識調査とその実態—	安藤
名嘉真咲菜	下顎骨の多変量解析に基づくニホンヤマネ(*Glirulus japonicus*)の分類	土屋
中村 真子	中国におけるシフゾウ(*Elaphurus davidianus*)の野生復帰についての事例研究	安藤
永幡 香織	アブラコウモリ(*Pipistrellus abramus*)のねぐら選択と温湿度の関係について	安藤
林 大樹	農大厚木キャンパスにおけるアズマモグラの日周期活動解析	土屋
平川 真邦	飼育下の野生鳥類における糞中コルチコステロン濃度	小川
松井あかね	羽毛を利用した遺伝子資源としての細胞の採取	小川
宮崎 美森	神奈川におけるアライグマ(*Procyon lotor*)に対する行政の取り組みと市民の意識	安藤

本橋喜一朗　動物園における昼夜逆転展示の照明の利用法の評価　土屋
安永　祥子　毛無山山麓における小型哺乳類および鳥類による巣箱の利用状況について　小川
山田木綿子　ダイサギ（*Egretta alba*）の採餌環境について　小川
山本　由子　動物園における展示鳥類の糞中コルチコステロン濃度の変化について　小川
吉田竜太郎　丹沢山地における中大型哺乳類の出現頻度と生息環境との関わり　安藤
吉本千恵美　丹沢山麓における二ホンザル（*Macaca fuscata*）群の行動域利用について－被害対策への反映　安藤
渡邉　直子　南足柄市大雄山における哺乳類相－特に超音波で鳴く動物の音声解析　土屋　安藤
亘理ひろ子　霊長目（Primates）10種の遺伝学的系統解析　土屋

家畜学研究室の閉鎖について

家畜学科長
栗原良雄

すでに皆さんはご存知のことと思いますが、家畜学研究室が平成17年3月をもって7年間で200名の学生を送りだして短い歴史の幕を閉じることになりました。

そこで家畜学研究室の設立にかかわった1人として、当時と現在の状況について説明をさせていただきます。

家畜学研究室の設立は、平成10年4月にさかのぼります。更なる農大の発展を目指して当時の農学部を改組し、現在の4学部となりました。農学科と畜産学科の2学科は現在の農学部として新しく厚木中央農場にオープンした新キャンパス（厚木キャンパス）に移転してきました。この改組に伴い総農場制度の下にあった厚木中央農場（現在、厚木農場）と富士畜産農場は、農学部の所属となり、組織改革が行われて、当時9名おられた教職員が1名の専任を残して農学部畜産学科に5名、応用生物科学部生物応用科学科に1名、短期大学部生物生産技術学科に2名異動になりました。畜産学科ではこの先生方を迎えるに当たって、学科では議論に議論を重ねてようやく家畜学研究室が設立されました。これには、国際食料情報学部に新設された生物企業情報学科に移動した畜産経営学研究室のあとに畜産経営がわかり個々の家畜に精通している農場の先生にふさわしい研究室ということで家畜学研究室を立ち上げ、この研究室に所属をしてもらうことになりました。当時は、大学の学部改組の方針として経営経済関係の分野をすべて新設の国際食料学部生物企業情報学科に集めたわけです。学科として「畜産経営学」は、畜産学科の大事な柱の1本なので何とか残してほしいと大学と交渉しましたが大学の方針ということで希望がかなえられませんでした。その代わり「畜産経営学」の講義科目を必須として残しました。だが、この科目を担当する先生が新学科に異動してしまったため、その分野を担当する研究室として家畜学研究室を新設したわけです。しかし、残念ながらこの目的を十分生かすことができないまま現在に至ったことは残念です。この研究室に所属している先生3名のうち平成16年3月に1名、平成17年3月には1名が退職され、所属教職員が1名となり、後任の採用ができないため研究室の維持が難しくなり、やむなく平成17年度3月をもって閉室することになりました。現在は、これからの社会のニーズにこたえられ、しかも安全な食料（動物性タンパク質）、家畜の生産科学ならびに生命科学領域にわたる教育・研究を目指した新たな畜産学科を構築すべく現在検討を重ねているところです。

家畜学研究室の思い出

ひとりの終夜体験談☆

家畜学研究室
小林美穂

「ピピピッ、ピピピッ」。セットしてあったタイマーが鳴った。私は卒論の実験の為に研究室でひとり、睡魔と闘いながら終夜をしていた。実験が終わらないことには先へ進めないから。しかし何といっても夜の学校は静かで不気味だ。夜中にトイレに行くのが怖くて、廊下の電気を全部点けながら歩いて行ったくらい。

この日は灰分分析の実験だった。さて終夜頑張るゾ～ッ!!って張り切ってた当日に換気扇が壊れてしまって本当に困った。何故なら、試料を灰化させる時にたくさん煙が出るからだ。実験室のドアを開けてやれば何とかなるだろう!と思っていざ始めてみると・・・、煙はもくもくと大量に出始め、6階まで昇っていった。私は6階から苦情がこないか、火災報知器が鳴ってしまうんじゃないかとビクビク・ハラハラ・ドキドキしてしまい、実験がひと段落しても寝るに寝れない・・そんな一夜を過ごした。まぁ、そんな時は研究室に置いてある「北斗の拳」を読むに限るかな☆

そんなこんなで、研究生の芳竹さんのご協力もあり、何とかすべての実験を終えることが出来た。そして今やっと本文を書き始めたところ。この〝ふじみの〟を読む頃には、ちゃんと卒論も終わって無事に卒業できているとイイなぁ!ちょっと不安もあるけど頑張るよ☆

後輩のいない研究室

家畜学研究室
貝瀬貴昭

学部改組により私たちの研究室は解消されることが決まっていたため、後輩がいませんでした。したがって、当然動物たちの世話も去年までの半分の人数でやっていかねばなりませんでした。動物の数は変わっていないため、当番がキツく感じることもしばしばでした。実験のために人数が必要なときでも四年生なので就職活動などもあり、ある程度人数がいれば1～2時間で終わるダチョウの採血に一日を費やしたということもありました。しかしキツイことばかりではなかったとも思います。厳しい反面、室員同士のつながりがとても強いものになっていたと感じられたのです。後輩がいないことは少々寂しくはありましたが、私にとって素晴らしい研究室であったと思います。

祝☆家畜研歌謡祭5連覇☆☆☆☆☆

家畜学研究室
石田貴之

「今年はゴリエにしよう。」

聖子らの意見で今年の歌謡祭は『Mickey』に決まった。僕と聖子は昨年度4連覇目を達成した時、ステージにたっていたメンバーの一員である。今年もアノ時の達成感を味わうために参加を決めていたのだった。

ゴリエかぁ…このまま男が加わらなかったら、おれがフロントで女装してダンスすんのかな…その時、メンバーの男は僕しかいなかったため、そんな不安が頭をよぎった。そしてその不安は現実となった。

しかし、絶対イヤだ、と思っていたことも、踏ん切りをつけたら、ラクなものだった。なにより、家畜研メンバーでステージに立ちたいという気持ちのほうが強かったから。俺は女を演じる、それだけだ。そういいきかせた。

そして、アノ10月30日、おれは女になった…

本番前、あったのはステージに立つと言う緊張感と胸のむず痒さだけ。すでにステージ脇にはタカコら13人の女たちが控えていた。

タカコ、聖子、幸江がステージに並ぶ…曲が流れる…キャイーン聖子、幸江!左右からアンガールズ真里、蓉

廃用家畜、ステージへ・・・!!

家畜学研究室
東内原　聖子

♪Hey Mickey!
松浦ゴリエと申します（ペコリ）
普通のかわいい巨乳です（ボイン）
うで、ワキ、へそ毛は濃いめです　Mickey!!♪

２００４年９月。10月30・31日の収穫祭を１ヵ月後に控え、密かに闘志を燃やしているヤツがいた。それは、自称〝家畜研一番の祭大好き、バカ騒ぎ大好きのこの私、『東内原聖子』〟だ!!

闘志の行く先は、収穫祭ステージ企画で行われる「陽気な牧場の歌謡祭」。毎年行われるこの歌謡祭に私が３年の時、先輩方と一緒に出場し、最優秀賞をとり、４連覇を達成することが出来た。あの感動をもう一度・・・。先輩たちの実績を繋げるため、今年の収穫祭は５連覇をかけての出場であった。家畜学研究室が私たち６期で閉鎖される事もあり、思い出作りも兼ねた「歌謡祭出場！」への想いは強かった。

メンバーは未経産♀12頭、去勢♂１頭の廃用家畜計13頭。曲もゴリエの「Mickey」に決まった頃、もう一つの子！プリンセス舞、美穂！ガレッジセール志保、祥子！ＴＩＭ幸子、劭琳！山上兄弟智子、恵！13人の女が乱れ舞う！タカコ間違える！

『喜び』を表した後、われに返り、気がつくと、拍手と歓声。そっけないインタビュー。ステージを降りるあたし達。楽しかった。ステージで、真ん中で、女になって踊ることは楽しかった…しかし、間違えたのは悔しかった、本当に悔しかった…

表彰式、各賞が授与される…あたし達が呼ばれない…高まる期待と不安…最優秀賞……!

「家畜学研究室です！」

飛び跳ねる美穂、祥子、本当か困惑しているかのような幸子、蓉子、抱きあう聖子、幸江、喜びを確め合うみんな。５回目ではなく、みんなにとって１回目の歓喜を。

アノ時の歓喜は忘れられない。

本当にこのメンバーのおかげで、この研究室のおかげで、出場に力を貸してくれた本部の皆さん、そして、雨にもかかわらず、会場にきてくださったみなさんの応援のおかげで賞が取れたんだと思っています。本当にありがとうございました。

今年は特に格別だった。そして…

女もいいね☆とし君。ミルクちゃん。

収穫祭ステージ企画「農大スター☆誕生」への出場も決まった。ガッテン！ヤル気の出てきた私たち。本番２週間前からＤＶＤを見ながら練習を開始したが、テンポの速い複雑なダンスにテンテコマイ・・・　その日覚えたダンスを忘れないようにと、帰りながら道端で、お風呂場で、またバイト中に有線から流れてくる音楽に合わせて・・・と、いたる所で踊ったという裏話も…。（笑）

そんなこんなで本番を向かえ、全13頭が付けまつげで目力アップ☆やたら頬は赤く、そして何よりバストがＥカップ以上という超セクシーな衣装に!!

一時は歌謡祭出場が危うくなったり、同じゴリエダンスのライバルが出現したりと色々あったが、見事！最優秀賞をとり念願の５連覇を果たすことが出来た。その時は涙がちょちょぎれるくらい嬉しかったぁ～ッ。

また、農大スター☆誕生でも優勝し、農大のスターになる事が出来、家畜学研究室はステージ企画で２冠を達成する事が出来た!!横山さんありがとう♪♪♪

（家畜研はさらにやっちゃった！何と模擬店でも最優良店をいただき、タイトル総ナメしちゃったよ☆☆）

歌謡祭・スター誕生で最優秀賞を取る事が出来たのも、家畜研みんなの協力と、応援に来てくれたＯＢの方々＆一般ピープル、そして企画を盛り上げてくれた本部の方々のおかげだニョ☆★☆

本当にありがとう!!!

４年間で一番楽しく充実した収穫祭だったニョ♪

２年間

家畜学研究室
峯村　祐太

「来年の委員長（幹事）は、おまえだからな!!」

まだ正式に発表される前に荻原先生からフライング気味に自分が次期幹事であると聞かされた。その後すぐに前任幹事の北条先輩に呼び出され、「やっぱ俺なんだ。」とケヤキでへこんでたことを今でも鮮明に覚えている。

幹事になってのデビュー戦は収穫祭でのＯＢ会である。知らない人ばかりで柄にもなく緊張していた。最後、会を閉めるはずだった副幹事の貝瀬君が不覚にも酔いつぶれてしまって仕方なく自分が閉めていました。ＯＢ会が終わった後も卒論発表の司会進行や追いコンなどと行事を進めて行くにつれ徐々に手を抜くことを覚えた。その結果、小鳥君や長島君に「もっと自覚を持ってくださ～い。」などと要らないヤジを飛ばされるようになった。

今年度は家畜研終焉の年ということで寂しいことに後輩がいない！何度となく他の研究室を羨ましく思ったことか・・・それはさて置き、そんなこともあり研究室のこれまでの歴史をつづった六年史（ふじみのが発行されるころには出来上がっていると思いたい）の話が持ち上がった。正直な話、はじめは「卒論もあるのに面倒くさ

い！やりたくない！」というのが率直な意見だった。研究室のみんなも乗り気ではなかった。しかし、計画が進んで行くに連れ、もう後戻りは出来なくなり渉外や副幹事、研究生の芳竹先輩等を中心として進めていくことになった。やっていくうちに楽しくなり、そのうちに案外やって出来なくはないと感じ始め今ではすばらしい六年史が出来上がることを期待している。（この文は1月の半ば頃に作成したものである。）

ここまで幹事になっての愚痴というか自分の愚痴というか・・・しかし皆さんに伝わってないと思いますがなんだかんだで、すごくいい経験をさせてもらいました。よく他の研究室の友達に「家畜研は楽でいいな～。」などと言われました。実際そうだったんですけど、他の研究室の人には分からない苦労や悩みなども多々ありました。他から見ればその程度と見られがちかもしれませんが自分にとってはその問題に直面し解決することで自分を大きく成長していけたと思いました。何事も経験が大事!!!そのことを改めて思った2年間でした。

こんな自分を支えてくれた貝瀬、美穂、特に貝瀬、定例会とか俺が遅刻した時のフォローとかサンキューな～!!!そして大谷先生、西脇先生、芳竹さん、研究室の皆さん、畜舎の羊（特にラーちゃん）、ダチョウ達、皆さんの支えがあったからこそ幹事というとても責任のある仕事を2年間やり遂げられたと思っています。他の研究室にも胸を張って自慢できるとてもいい研究室でした。

最後に一言。

みんなありがと～!!

（石田パクッてゴメン！）

退職にあたり

僕の牛飼い体験

家畜学研究室教授

大谷　忠

大学進学の理由

僕の父は新潟で天然記念物に指定されている日本鶏の「唐丸」を飼育していた。飼育した何代目かの唐丸が、年1度の共進会（昭和33年だったと思う）で、体形、長声（18秒）の質の良さを認められ日本一になったことがある。このように庭先で鶏を飼っていた父親の後姿を見ていた影響なのであろうか、高校生になった僕は、将来養鶏家になるのも面白そうだと、本学の畜産学科に進んだのである。

当時の畜産学科の校舎は千葉県茂原市にあった。そこは東京世田谷の分校であり、本校から電車で2時間もかかる片田舎であった。しかしこの田舎校舎には全学生が泊まれるほどの立派な寮が3棟もあり、また、他大学にはない広い農場を有していた。それはあらゆる農作物栽培や、牛豚鶏の飼育が体験出来る農学徒の理想的な楽園で、貧乏学生だった僕にとっては、通学のための乗りものや高い下宿代など必要がなかったので、全く都合の良いところだった。

牛の目に魅せられての心変わり

畜産学科には新潟で鶏関係の県職を長く務め、鶏に詳しい石原太左衛門先生が居られたので、新潟出身の僕は1年入学時に、心も弾む想いで先生の部屋の戸を叩き、入室許可を強引に頂いたのを覚えている。こんな出過ぎた態度を同室の先輩たちが冷たい目で見ているのも知らずに。それは後日凄い猛者ばかりいるクラブの柔道部に入部した時に、滅茶苦茶に投げ飛ばされてはじめて気が付いたのであった。

鶏の世話のために、毎朝通う学生寮から鶏舎までの途中には、平屋の薄暗い牛舎があった。その前を通る時には牛の鳴き声や搾乳をしている人たちのかけ声が聞こえ、何かスケールの大きい仕事をしている様子が伝わってきて、覗き見をしたくなる時があった。

五月のある雨の日の朝、寮から最も遠い鶏舎に行くのが大変で、牛舎の入口で雨宿りをした。この時中から大きな声で「外はぬれるぞ、中にはいんなよ」と搾乳バケツを両手に持った背の低い小太りのおじさんが近寄ってきた。農大農場の技術職で牛担当チーフの今関　忠さんだった。

「君は毎朝、この前を通るとき中が気になるようだけど、搾ってみっか？今日1日なら石原先生も何もいわねえだろう」。

僕が石原先生の研究室に通い、まだ1ヶ月足らずだと言うことを知っていてのことである。突然の話だが興味があったので甘えることにした。牛を近くで見たのは初め

てだった。ホルスタイン種はとてつもなく大きく見え、動物園の写真で見た象のように感じたのである。とても搾る勇気はなかった。「見るだけで結構です」と言いながらそっと近づいてお腹の部分に触ったとたん、その牛の横蹴りがあり、もう少しで飛ばされそうになった。

「馬鹿でねぇか、牛だって声もかけられず急に触られれば驚くわ」

と注意したのは当時助手だった端　武義先生だった。この二人は後日の話だが、僕が鶏より牛が好きになると直感したと言う。確かに、この日に見た牛がスタンチョンに繋がれ拘束されていても、鶏のように騒がず、人間の世話に身をゆだね、与えられた飼草を黙々と食べ、狭い牛床でじっと搾乳をさせる様には本当に魅せられてしまったのである。それに目がきれいで、特にジャージー種のカールしたまつ毛はなんともいえない美しさがあった。

石原先生には黙って4～5日牛舎通いをした。牛に餌をあげた。糞取りもした。手による搾乳もした。そして搾りたてのミルクも飲ませてもらった。牛の魅力は目だけでなく全てに在った。この時はもう完全に牛のとりこになってしまっていたのである。

新規就農をした牛飼いの生活

親、兄弟の心配を全く無視して、大学卒業とともに酪農を夢見て、静岡の山の中に新規就農者として入植した。仮住まいの掘立小屋は冬になると粉雪が舞い込み、寝ていた布団の上が真っ白になる隙間だらけの建物で、水道もなく炊事用具一つも置けず、いろりの両脇に畳二枚が敷けて、あとは土間のみの5坪程度の部屋だった。電気は来ていたが裸電球1個で、他に差し込みコンセントらしきものがなかったので、学生時代に使っていたラジオや電気かみそりのために、この電球横からタコ足配線をして利用していた。水は外の小さな水路の水を牛乳缶に汲んで使ったが、雨の時は水路がにごり、澄んでくるまで待たなければならなかった。夏にはボウフラが缶の中で泳いでいることもあったが、缶を叩けば瞬間的に下にもぐるので、その時ひしゃくでサッとすくい上げれば問題なかった。慣れとは恐ろしいものである。しかし、水路の水に時々黒い粒状の物が多く混じっていることがあった。これは水辺に生える雑草の種子だろうと気にせず利用していたが、半年も経って、これが水路の上流で飼われている県営の養鱒場の鱒が出す糞であることが分かった。僕のお腹にずいぶん入ったであろうが、これまで病気一つしなかったのは、ひょっとすると鱒の糞は万病に効くのかもしれない。こんなことは今まで誰にも言ったことがない。

食事は毎日いろりに薪をたき、吊り下げた鍋で「ごった煮」を食べていた。近所に住む農家のおばさん達が、僕の生活に同情して持ってきてくれた野菜や山で獲れたイノシシやウサギの肉が入った時は抜群の味であった。こんな僻地でもラジオから流れる相撲実況は良く聞こえ、一番ごとの勝負を聞きながら、一升瓶を抱えて鍋のものに箸をさし、その味は時に、関取が食べるチャンコ鍋よ

り美味いのではないかと思ったくらいである。こんな生活が2年ほど続いた。昼の間は草地造成のために、人力による雑木切りと伐根作業の毎日だった。僕が造ろうとしている牧場は海抜730mの高冷地で、全面積が30ha（厚木キャンパスと防災公園を足したよりもっと広い面積）だったからである。だから夜は酒のせいもあったが、むしろ疲れでよく眠れた。

本格的な牧場つくり

この地に入植した僕は、富士山周辺の開拓者たちの最後と聞いている。戦後、長野や山梨に住む次男、三男あるいは満州からの引揚者たちが当地に続々と入植していたのである。僕らが、長い間待っていたのは当時の農林省が決めた農業構造改善対策の大規模草地改良事業の推進だった。これにより多額の補助金が出たのである。僕のところにも700万円が補助された。現在の価値に換算すると2億円と言う数字になるかもしれない。これで大型機械による草地造成、道路と追い込み牛舎、それと待ちわびた水道設備が完成したのである。僕の住まいもあの堀立小屋から、頑丈に出来ている追い込み牛舎の隅に仕切られた一角に進歩した。狭いが前と比べれば天国だった（このような形の就農の道についての講義は大学ではなかった）。

先ず、牛1頭を導入した。餌の確保の目安が付くと多額の借金を覚悟してのことだったが、家畜商からいっきに10頭のホルスタインを買い込んだ。粕酪農家で飼われて牧草の味を知らない牛、手搾りの経験がない牛、搾乳時に足癖が悪い牛、年齢がはっきりしない老牛など様々であった。値切ったからなのであろう。兎に角、この牛たちの前歴を知らないまま、数ヵ月後に予定されているそれぞれのお産を待つことにした。

酪農の技術は手作業の体験から

当時大学を出て牛飼いになろうとする若者は皆無のようだった。NHKや民間のラジオ局などの静岡県の報道関係者は僕が初めてだと、うるさいほど取材に来た。そして取材がまとまると何回も報道された。人前での話が下手な僕はマイクの前で小さな声でしか応答が出来ず、最後まで将来の夢を旨く説明することができなかった。しかし、ラジオのせいでいろいろのところの高校や大学から、もちろん農大からも、団体の見学者が多く訪れた。

それでも上手な応対が出来なかったはずなのに、「実習させてくれ」、「雇ってくれ」と言う若者が次々に現れて、戸惑ったり、喜んだりしたものである。このような事で、思わぬ速さで労働的スタッフも揃い、いよいよミルク生産が始まろうとしていた。

土地を求めて2年後の初秋に補助金事業の草地造成工事25haが終わった。雑木林地が、霧が出ると隣接地が分からなくなるほどの広大な裸地になったのである。これを牧草地にする次の作業は寒くなる前の牧草の種蒔きである。牛舎の隅に運び込まれた種子の山は2t近くあったであろうか。播種機がないから、これを手で蒔かなけれ

ばならなかった。種子は主にイネ科のオーチャードグラスとベントグラス、マメ科はラジノクローバーとレッドクローバーの混播にする4種だった。これらをバケツに入れて手で蒔く作業は想像を絶するほどつらい労働であった。山梨県の県立美術館に大きな絵画でミレーの「種蒔く人」が展示されている。絵の中の男が袋の中の種子を格好よく、すいすいと蒔いているように感じていたが、実際は大変な作業なのだと経験して分かったのである。蒔く時に適当に手の中の種子を遠くへ散らすと比重の関係で重いマメ科は遠くへ、軽いイネ科は手前に落ち、生えむらが出来ることが分かったり、蒔いた種子の発芽を向上させるために、その手段として二股になっている松の枝を切り取り、それを腰にかけて蒔いた種子が土とよく混ざるように引きずりまわった。つまり機械のレーキの作業をやったのであるが、草地造りの難しさや大変なことを体で覚えたのである（このようなことも大学の講義にはなかった）。全てが人力で、馬や牛を使った時代以前の原始的なやり方でも、25haの面積を1週間かけて一人で蒔き終えた時は、涙が出るほど嬉しかった。空バケツをぶら下げて、放心状態で立っていた僕は、富士山が秋の夕日に強く照らされ、北斎が描いた「赤富士」より、この時の夕日に染まった西富士がもっときれいだった事を今でも覚えている。

延べ500頭のお産の中で

いよいよ秋から毎晩のようにお産が始まった。なぜか夜中に集中していた。正常分娩はふんわりと敷かれた敷料の上に横たわり、陣痛とともに仔の前足が揃って外陰部の外に出てくる。頭が完全に出る頃になるとお産は終わりに近い。母牛の力みは頭のあとに出る胴と後肢の部分を一気に押し出し、仔が誕生する。親は直ちに立ち上がって生んだ仔の世話を始める。これが普通の分娩である。

しかし、大変な癖のある母牛もいることを徐々に覚えた。立ったままで、しかも歩きながら分娩するもの。生んでも仔のことは放り出したままで、餌を求めにいったりするもの。極端な例では頭や足でこずき回して弱らしてしまう親もいた。

また、難産も多く体験した。手足が子宮内で折れ曲がっているもの、頭が足より先に出ようとするもの、体が全く逆の位置になっているものなど様々だが、異常分娩に慣れた獣医師ならこの程度では簡単に胎位を矯正して分娩させるだろう。しかし、胎児が大きくなりすぎて産道からなかなか出ない場合は何人かで引っ張り出すしかない。僕が体験したなかで近所の人たち数人に頼んでも、頭は出てもそれ以上は3～4時間かけても出すことが出来ない初産の牛がいた。獣医も都合で来られなかった。焦った僕は仔より親を助ける決意をした。樹木の剪定肢に使う細い鋸を手の平の内に納まる大きさに折り、味噌汁用の鍋で十分煮沸消毒をしてから、これを右手で覆い、産道を傷つけないように外陰部からゆっくりと挿入し、あとは祈る気持ちで一気に首を切って頭を取り出した。

続けて前足の肩を切断した。すると残りの部位は簡単に引っ張り出すことが出来た。第1次破水が始まって、胎児の全部位の排出までになんと12時間が経過していた。当然この牛の当乳期は全く望めなかったが、次のお産は正常分娩で、適正な泌乳量を記録していた。牛の驚くべき能力に感心するばかりで、手術中?（切り出し中）、立ったまま踏ん張り続けたこの牛の頑張りようと、その顔は今でも忘れることはできない（このような時はこうしなさいという大学での講義はなかった）。

驚くべき牛の体

牛で驚かされたことでは、こんなこともあった。真冬の非常に寒い深夜、多分零下10度を下回る日だったと思う。壁ひとつ向こうの牛舎からお産の時のような苦しげな唸り声を聞いた。分娩予定の個体はいないはずだが、見回りに行くと、1頭の若牛が餌を十分食べたらしく、大きくなった腹を後肢でける仕草をしていた。目は真っ赤に充血して口からは泡混じりの唾液がだらだらと流れ、苦しそうだった。分娩は2ヶ月も前に終わっているのに、こんな様子は初めてで、何がなんだかさっぱり分からなかった。深夜だったので獣医も呼べなかった。そのうちに左わき腹が急に大きくなった、当然右へも大きく張ってきている。牛は体調が悪いと馬と異なり立ったままの姿勢をとるが、この牛は背中も下腹も丸く膨れ、押すと倒れこんで起き上がれない状態になってしまった。背中が地面につき、4肢が宙でもがき、まるでゴム風船のようであった。この時、はじめてこれは大学の講義で聞いた「急性鼓張症」だと気づいたのである。「ガスの異常発生だ、このままでは窒息して死ぬぞ」とあわてたが、僕には獣医が使うガスを抜く「套管針」なぞ持ち合わせていなかったし、有っても使い方が分からなかっただろう。牛はますます膨れ上がり、舌を口横に出し、眼球が上を向き白目になってしまっている。「もう待てない、ガス抜きだ!」僕は覚悟して、用意した刺身包丁で左わき腹を刺した。ガスが一気に噴出し、胃の内容物が僕の体全体に降りかかった。牛は一気に抜けたガスのショックで瞬間的に絶命してしまった。おとなしく泌乳量が多かった牛だったから、可哀想であり、残念で、泣きたくなる思いだった。牛を殺した初めての経験だった。大学では、鼓張症はホワイトクローバーに含まれているクマリン様物質が作用して起こると聞いていたが、この時は冬で、クローバーなどのマメ科類はなかった。餌は豊作で値が下がって売り物にならなくなったキャベツを大量に仕入れ食べさせていたのである。まだ牧草が十分採れず、この与えていた冷えたキャベツのせいだったと今でも思っている。その後、病気は早期発見だと、よく観察する習慣がつき、鼓張症で死亡させたことはなかった。

この他にも、牛飼い生活の間に多くの体験を積んだ。牛がバタバタと倒れ、この原因が獣医も、家畜保健所も判断できず、後日に新型の牛インフルエンザだったことが明らかになったこと、猛烈な台風が来て、牛囲いの電気牧柵が倒れたため、50頭の牛が脱柵して一晩で何十キ

ロも離れた富士山の中腹まで逃げてしまったことなど鮮明に覚えている。これらの牛をどのようにして引き戻したかを想像してほしい。

大学で得た知識の応用

僕はこの牛飼いの後、ある事情により大学で教鞭をとるようになったが、これまで話してきた講義内容には今記述した体験を話してきたつもりである。大学での講義は基礎的な知識が多いだけに、新規就農をするためには実際面の知識や技術を十分習得しておく必要があると思う。だから大学で得た知識を出来るだけ早く応用できるよう、農家で学ぶことも重要であろう。

ところで、新潟の中越地震で山古志村が大変な目にあった。本学科を2年前に卒業した関　克史君は取り残してきた牛たちを村の人々の助けを得て救助し、牛飼いを続けようと頑張っている様子をテレビで見た。彼もこれから多くの体験をして立派な牛飼いになると思うが、就農する関君が地震の影響で僕にも理解できないようなハンディーを乗り越えて新しい世界を築き上げてくれるだろう。この体験を将来において、後輩の学生たちに話してもらいたいものである。

今後の新規畜産就農者のために。

ふじみの寄稿原稿

動物関連学ではない、こだわりの畜産学を

家畜飼養学研究室助教授
祐森誠司

近年学術レベルの向上に伴って、学問体系が細分化し、教員・研究者の専門領域も多岐に亘るようになっている。そして、その結果として学会の細分化が進んでいる。この傾向は畜産学関係に限らず、医学・獣医学・薬学等の理系や他の文系においても同様である。基本的に畜産学領域全体を包含しているのは日本畜産学会である。関連学会・研究会を羅列するならば、北海道から九州沖縄までの地域で区分された畜産学会（関東近辺は関東畜産学会）、日本獣医学会、日本実験動物学会、日本哺乳類学会、日本生殖学会、人間動物関係学会、在来家畜研究会、日本ウマ科学会、比較内分泌学会等々、地域や対象動物、学問分野ごとに細分されてきている。これら学会以外に自分の専門領域の関係で会員となっている学会として学問領域別では日本家畜管理学会、日本畜産環境学会、日本ペット栄養学会、家畜栄養生理研究会があり、対象動物別では日本養豚学会、日本家禽学会がある。これらのなかで学生時代（20年程昔）にはなかった学会として、日本ウマ科学会、人間動物関係学会、日本畜産環境学会、日本ペット栄養学会がある。日本畜産環境学会の包含する内容はこれまで家畜管理学領域で検討・討議されてきたが、社会問題に対応し、独立した学会が設立された。そして、これより時期が遅れて応用動物行動学会が設立された。この学会もやはりかつては家畜管理学の領域で検討・討議されてきたものである。これら2つの学会を構成している会員はその設立目的に応じて異なってきている。研究領域の細分化が引き起こした問題の一つとして研究内容を公表する学会への所属が複数に亘ることで、その会費がかさみ、自分の力を注ぐ学会にだけ所属するという整理が進んだことである。これにより、公表データはその学会会員には示されるものの、他の学会に所属する関係分野研究者には知られない状況にある。この点に留意した学会では他の学会誌に公表した研究成果をさらにまとめなおして発表することを勧めたり、他の学会の論文名を掲載したりしている。しかし、これもその学会に加盟している会員のみの特典であることは否めない。別の対応として、ＩＴ情報化の時代であるのでインターネット上に論文全文を掲載する動きもある。これは主として国際化を名目に進められている。それぞれの学会が独自に情報の公開を進めているが、そのデータ・知見を利用する際の注意事項があることも学生・卒業生諸氏には知っておいて欲しい。パソコン上で簡単に情報が入手できたとしても、そのデータ・知見には必ず著作権が伴っている。また、近年では知見を導いた「考え方（知的財産）」にも特許が認められかねない状況にある。公表された内容を参考にする、または引用することは出典を

明らかにすることが条件として許されているが、公的な場面での利用には必ず発表者あるいは学会事務局の許可を得ることが必要であることを忘れないで欲しい。

話題が主旨とは異なった方向に展開してしまったので、軌道修正するが、日本家畜管理学会と細分化により設立された日本畜産環境学会では所属会員がかなり重複している。これは母体となる日本畜産学会会員と日本家畜管理学会会員の重複と同様に親子関係で在るが故に当然かと思えるが、現在は親子から孫の関係に分岐し、孫の間では会員に開きが生じ、包含領域の裾野が広がり、それに併せて親の裾野が広がってきている。裾野の広がりが他の領域でも進み、学際領域ができていることは、今後の学問の発展に有意義なことであることはまちがいない。このような社会情勢を踏まえて、本学畜産学科は約10年前に学科名称の変更が奨励された際、「名は体を表す」として「畜産学科」という名称にこだわり、変更は行わず、「基盤となる食糧生産をしっかり担い、裾野の広がった学問領域全体を包含し、教育・研究を進めるのが本学畜産学科の正しい姿」として訴えてきた。他大学は名称変更を行い動物応用科学科、動物資源科学科等とし、進学する学生は食糧生産という基盤から離れ、野生動物の保護に関わる領域に関して学ぶ志向を露わにしている。そんな中、教員も学生のニーズに対応することが責務であり窮々としていることを伺い聞いている。学科名称を変更した当時の話を思い起こせば、名称変更しても教育内容は余り変わらず、学生の頭の中を畜産に切り換えていくんだという勢いがあったが、10年の年月が経過するなかで逆に教員の頭の中が切り換えられてきているようである。特に本学を含めた私立大学では受験者数が存亡のバロメーターとなり、その減少は大きな問題である。受験生の確保のために受験生のニーズに併せる、そのために研究領域を広げ、その活動基盤として既存の設立学会の趣旨とは逸れてしまうことから新しい学会が必要となる。逆に新しい学会が設立されたことにより教員が思いきった研究領域の拡大が計れるということもあるのだろう。個々の研究が進み、新しい知見が見出されれば教育内容も広がってくるので研究・教育の両面が巧くシンクロナイズして名称変更は成功のように思える。ここに大きな落とし穴がないだろうか？かつて、畜産学科として教育・研究を進めてきた食糧生産という命題が遠く彼方に置き忘れられてしまっていないだろうか？本学ではかねてから実践的な教育が重視されており、卒業生が家畜飼育管理の現場や食品加工製造の現場、さらには一時の現場修行から指導者、経営者に上り詰められた方も数多く、皆それぞれの立場で活躍されている。昨年は同窓会の講演会で食肉を取り巻く状勢について4名の方に講演していただき、昨今の「食の安全・安心」に対する課題も多く残っていることが報告された。これらの課題解決に取り組む後進の育成と前途洋々たる学生と共に基礎的な知見を積み重ねていくことが本学畜産学科の使命であると考える。

大学教育であるのだから一般知識を常識として身につけることはいうまでもない。そして、今自分の所属する大学・学部学科の使命を見つめ直して欲しい。当たり前の話は常に自問自答していかなければ、意識からは薄らいでいくものであろう。光陰矢のごとし、10年一昔いや5年一昔の時代、地に足を付けていなければ畜産学科50年の歴史は砂上の楼閣となってしまいかねないのではないだろうか？あくまでも歴史を大切に守るだけではなく、新しい時代を開拓することは重要であるが、目先に迷わされず、いつも基本に立ち返り考えてみたいし、学生諸氏にも考えて欲しい。本学にもやがて「動物・植物と人間生活の関係を重視した共生分野を専門とする学科」が設立され、野生動物学やコンパニオンアニマルに関する学問体系はそちらの学科が主となるであろう。この流れは畜産学科としての教育・研究において本来の目的を再認識する機会であるし、またこれまで裾野を広げて取り組んできた野生動物の能力開発や家畜への導入、さらには家畜も我々と同じく生命を育み、その一生において平安な時を過ごす権利を有することから飼育者と家畜のために追究してきたよりよい飼育環境の確立等は継続して行い、本学科のキーワードである「人と動物とのパートナーシップ」を放棄するものではないと考える。

大それた話題を一塊の教員が書き記すのはおこがましいが、BSEの発症、高病原性トリインフルエンザの発症と我々の生活、いや生命維持に不可欠である食に関わる問題が大きく取り扱われ、「食育」なる言葉が創造される今日、「農大畜産学科ここに在り」と大きな声を上げたい。

今回の寄稿文依頼を受けたとき、何も考えず了解し、パソコンの前で思いつくままに文章を打ち込んでみた。読み返してみると何となくカッコつけた堅苦しい文章となってしまったことをお詫びするとともに、最後までお付き合いいただいた方には感謝し、ご理解をお願いして終わりとする。

家畜衛生の仕事に携わった21年間

家畜衛生学研究室助教授
村上覚史

昨年の4月から畜産学科の家畜衛生学研究室に赴任して、教鞭を執ることになりました。その前は千葉県の一職員として、4ヶ所に点在する家畜保健衛生所と家畜衛生研究所で21年間、家畜衛生の仕事に携わってきました。この21年間という年月はそれほど長いとは思いませんが、日本という国がみるみる変わっていく時代であったように思います。高度成長の末期からバブル経済の崩壊、そして、牛海綿状脳症（BSE）の発生に象徴されるあるいは契機とした国民の食に対する「安全・安心」への関心の高まりという非常に大きな転換期でもあったわけです。その変遷を私が携わってきた家畜衛生の面からみてみましょう。

私が県の家畜保健衛生所に入所した1980年代前半は、法定伝染病である豚コレラや、その類症鑑別でよく問題となった豚のトキソプラズマ病がしばしば発生していた頃です。今ではこういう経験をする小動物診療専門の獣医さんはいませんが、それらの先生を雇い上げ、飼養規模が拡大しつつある養豚場に入って、豚コレラワクチンの一斉注射を彼らと一緒に実施していました。当時は、犬・猫診療中心の獣医さんといえども、どこかで産業動物の診療と関わっていたのです。牛では、結核病やブルセラ病という法定伝染病を撲滅するために、家畜伝染病予防法（家伝法）によって年1回の定期検査が全酪農家に義務付けられていました。酪農家の戸数も多かったので毎月、1ないし2週間はその検査に明け暮れることになり、家畜保健衛生所の主要な業務でした。このように産業動物の特に伝染病を中心とした蔓延防止が職務の中心となり、家畜衛生上重要な機能を果たしていた時代でした。私が勤めるさらに以前の、高度成長経済まっただ中にあった家畜保健衛生所は警察獣医といわれるほどの権限を持ち、家畜伝染病撲滅に向けて躍起になっていたのです。今では、そんな感情を持つ職員はいませんが、高病原性鳥インフルエンザの発生をみるように、家畜保健衛生所の重要な仕事として引き継がれています。

バブル経済が崩壊し、1990年代に入ると、多くの畜産農家、特に養鶏や養豚は規模を大幅に拡大し、飼養頭数を伸ばしてきました。豚コレラ、牛の結核病、牛のブルセラ病および鶏のニューカッスル病といった重要な伝染病は、ワクチン接種の普及および長年の定期検査の甲斐あって、ほとんど発生しなくなり、一応、産業動物の健康は保障されたかのように見えました。しかし、多頭羽飼養が可能になることによって密飼状態となり、飼育動物の生理や行動を無視する農場がみられるようになりました。加えて、物流のグローバル化もますます盛んになるなかで、思わぬ病原体が知らないうちに畜産先進

国から侵入してきました。その結果、今まで考えもしなかった疾病が流行するようになったのです。この時期、千葉県の養豚地帯である北総の台地では、「干潟病」とか「春風病」という豚の流産が頻発し、あれよ、あれよ、という間に全国でも同様の流産が発生しはじめました。そして、流産が終息すると、こんどは離乳して少し成長した子豚に呼吸器障害が目立つようになり、その後、子豚はガリガリ痩せて、ついには死んでしまうのです。こういうヒネ豚を地元の人は「ヘコヘコ病」と呼ぶようになりました。「ヘコヘコ病」は世界的にも有名となり、これらの症状を示す病気に対して豚繁殖・呼吸器障害症候群（PRRS）という正式名称が与えられました。この病気はウイルスが原因ですが、このウイルスが単独に感染しても豚に病気を起こしません。しかし、このウイルス同様に、たいして力のない似たような病原体と組むと、とてつもない悪さをするのです。最近、このPRRSと思われていた病気のなかには、もっと悪質な病原ウイルスの関与が分かってきました。この病原体も単独では実におとなしいのですが、PRRSウイルスと組むと豚のリンパ球を消滅させてしまう能力を発揮し、豚を免疫不全にさせてしまいます。豚はガリガリに痩せ、まるで農場全体の価値がなくなってしまうような感じすら受けるくらいです。

この現象はあくまでも家畜衛生上の問題です。さらに、この時期、動物に感染してもほとんど症状を示すことはないのですが、その生産物を通じて人の健康を脅かす病原体が出現して来ました。その代表例として鶏卵を介したサルモネラ食中毒があります。牛には全くといっていいほど症状を示さない腸管出血性大腸菌O157もその典型といっていいでしょう。サルモネラ エンテリティデスもイギリスから侵入し、日本の採卵鶏農場に急速に広まって行ったのですが、農場サイドでの病原体の撲滅は困難を極めました。私が係わった仕事でもその難しさは尋常ではありませんでした。産卵率の向上と飼育管理の合理化を求めて建てられたウインドウレス鶏舎では、その薄暗い舎内環境と豊富な穀類を主とした餌を目当てに、多数のクマネズミの繁殖を許してしまいました。そういう鶏舎にサルモネラが侵入ると、いつの間にか鶏の体内で増菌し、糞便に排泄され、飼料や内部環境を汚染していきます。そして、そこで生息する多くの鼠に感染し、鼠も症状を示すことなく、持続的に排菌を繰りかします。従って、鶏、鼠、舎内環境が常にサルモネラで汚染され、いくら徹底的に鶏舎内を消毒しても、新しい健康な雛を導入してもサルモネラ食中毒の温床を絶つことができません。この被害を受けた農場主の辛さは大変なもので、もしこの農場の卵から食中毒が起こったならば一大事ということから、信じられないほど多額の保険を掛けていたくらいです。そのころ、ようやくサルモネラワクチンが輸入され、わが国でも利用が可能になりました。しかし、1羽41円というワクチン代では、あまりに高価でした。いろいろと行政的な交渉を試みましたが、鶏舎内全体の細菌量を減らすために、鼠の徹底的な駆除

と徹底的な消毒などで対応する以外、手はありませんでした。現在、国の検疫体制が強化され、衛生管理の徹底と多くのワクチンメーカーがサルモネラのワクチンを販売し、以前よりずっと低価で利用されています。その結果、鶏卵を介したサルモネラ食中毒は減少しています。

このように、家畜衛生上の問題であったものが、いったん、公衆衛生上の問題に広がったとき、そのスケールはただならぬものとなります。消費者は生産現場に目を向けるようになり、衛生上の問題を鋭く指摘してきます。なかには、農場現場にも食品衛生で実施されているような衛生管理を求める論調もあり、辟易しますが、販売業者が衛生的に管理された農場との提携を重視していることは明らかです。私の経験では、「牛乳はいずれ殺菌されるから細菌が多くたって白ければいいのだ」などといっている農場が集まった組合は、見ていて活気がなく、勉強もしていないせいか、情勢に疎いようでした。一方、農場サイドでも食品を生産しているという意識がある組合では、衛生管理に努力した成果が反映し、コンビニエンス会社との提携を勝ち取っていました。しかし、この時期は「食の安全・安心」という概念がまだそれほど育ってはいなかった、というのが現状ではなかったかと思います。

その必要性を強烈に意識せざるを得ない事件が、日本におけるBSEの発生です。2001年9月10日、その日、私はひどい風邪を引き、休暇をとって家で寝ていました。大相撲の千秋楽を見終わって、次のニュースを聞き流していると、「わが国で初めて、BSEの疑偽患畜が千葉県で発生した」という、アナウンサーの思いがけない語りが私の耳に飛び込んできました。

このBSE陽性牛は、8月6日、と畜場で屠殺された病畜の廃用牛で、全国的に行われていたスクリーニング検査のために、牛の頭部が私の勤めていた家畜保健衛生所に搬入されました。「日本では出ないだろう」と誰しも高を括っていたのです。その生材料を動物衛生研究所に送り、いち早くウエスタンブロット法によるBSEプリオン検査を実施した結果、陰性と出ました。しかし、その後、県の病理担当者はその延髄の標本にボコボコ穴が開いているのをみつけたのです。陰性という結果が出ているとはいえ、その穴はどう見ても典型的なBSE病変でした。その疑問を解くために、病理を専門にしている動物衛生研究所の先生にみていただくことになりました。私は後でこの先生から聞いたのですが、驚いて何とも言葉に出せなかったそうです。そして、すぐ確定診断として免疫組織化学的検査を実施し、そこにBSEプリオンの存在を目の当たりにしたそうです。ここに至って巨大な爆弾が炸裂したといっていいでしょう。その後、発生農場の全頭の牛を殺処分することになりました。私もこの作業に携わったのですが、一日以内で実施しなければならなかったこともあって、なんとも危険でかつ辛い仕事でした。余談になりますが、8月6日に搬入されたBSE陽性牛第1号の脳を取り出した私の同僚は後に、「これで俺は本当の痴呆公務員になるのかなー」とぼや

いたのを忘れることができません。

家畜どうしの伝染病の範囲であれば、いくらその伝染病のリスクが大きくとも、せいぜい一部の経済を混乱させるに留まります。日本でBSEが発生する少し前、口蹄疫が発生しましたが、BSEや高病原性鳥インフルエンザほどの関心は向けられませんでした。しかし、BSEは気持ちの悪い病気というイメージを創るに十分でした。その病原体「プリオン」は、化成工場で廃用家畜から作られた肉骨粉に含まれ、それを牛、特に哺乳子牛が食べると、何年か後にBSEを発症します。人工的な共食いを作り出したことによるこの奇怪な新疾病は世界を騒がせたのです。しかも、プリオンは生命体ではないたんぱく質から成り、煮ても焼いてもその感染性はなかなか失われないという、何とも不可解な病原体です。そして、人に感染するという事実は、消費者、畜産関係者を含め一種のパニック状態に陥らせました。そのような中、この対策として、わが国はすべての牛に対してBSE検査を実施することを決断したのです。その後、ある程度BSEパニックは治まってきてはいるものの、アメリカの肉牛輸入問題を見ても分かるように未だにその感情は解消されていません。

BSEの発生は、わが国に「食の安全・安心」とはどうあるべきかという問題を投げかけました。「食の安全・安心」とは、科学的にその食品が安全であるということを理解してはじめて、安心が得られるというように私は解釈していました。例えば新鮮な魚介類の中には生食するときは塩水で洗うのではなく、真水できちんと洗いさえすれば安全なものがあります。腸炎ビブリオという菌は、塩水では死なず、真水で破壊されるからです。一方、腸管出血性大腸菌O157は毎年患者が出て死ぬ人もいますが、私たちが牛肉を食べるときに、その牛が以前その菌を持っていたかどうかなどということを意識することはありません。おそらく、それが不治の病ではなく、適切な治療をすれば死ぬことはない、という潜在意識があるからでしょう。しかし、BSE牛の場合はどうでしょう。2001年10月以前に知らずしてBSE牛肉を食べたとしても、新型クロエツフェルトヤコブ病（vCJD）を発症する日本人の数は、1億2000万人中0.135～0.86人だと推定されています。今後、特定危険部位の除去が徹底して実施されると、さらに発生率は低下します。しかし、BSE全頭検査の中止に対して、なかなか消費者は納得していないのです。その理由の中には、「安心」の基盤となる「信頼」が不確かなのではなかったのかと私は思っています。

これまで私が携わってきた家畜衛生上の観点から畜産の置かれている現状を概観しました。四半世紀前までは、農場主や畜産に関わる行政機関はその領域だけの問題を扱っていればよかったのです。しかし、現在の産業動物の多くはストレスの多い環境下で飼育されていることから、本来そなわっていた十分な免疫力を持ち合わせているとはいません。いったん、新しい病原体が侵入すると、そのような動物群で爆発的な流行が始まります。

これからの畜産経営は、その経営理念の中に「食品を生産している」「人獣共通感染症（動物由来感染症）への関心」という意識なしにはやっていけない時代だといえるでしょう。

畜産学科にこられる学生諸子の動機の中には、動物が可愛いからとか、野生動物や動物園動物に興味があるからとか、比較的動物との親しみをイメージしておられる方が多いように思います。きっかけは様々ですが、そういう動物群の中に、われわれの主要な蛋白源とならざるを得ない産業動物にも目を向けてほしいのです。そしてそれらの社会的な重要性を具体的に学んでほしいと思うのです。あなたが社会人となり、消費者になったとき、畜産サイドからの目を持つ人物として育ってほしいとも思っています。逆に私の立場では、産業動物のみの関心では片手落ちだといえるでしょう。広く動物全体を視野に入れた動物衛生としての視点が必要だと考えています。

農大に来て

家畜繁殖学研究室講師
岩田尚孝

大学を出て12年、色々な種類の仕事をしましたがもう一度大学生活を送ることになるとは思いませんでした。大変濃い1年が過ぎまた一つ年を取ったわけです。ここは町から離れた山の上ですが、大山を望む夕焼けや、広大な関東平野に僕は感動です。

この場を借りて、僕の畜産学への思いと、今の仕事を選んだ動機、大学での勉強への考え方と農大生と接した感想を書きます。

私は畜産学を多くの学問の中で非常に取っ付きやすくて興味深い分野だと思っています。専門は家畜繁殖学ですが、例えれば、虫や他の動物たちは食べるほかにはこの繁殖にすべての命をささげて頑張るわけです。なかには雌に食われてしまう場合もあります（怖いですねえ）。学生さんの中にも勉強よりも恋路に夢中な人も多いかもしれませんね。それほど身近で夢中になる分野なのです。原理がわかって造る機械と異なり、生物の中のメカニズムは何兆何億兆という生物が変異を重ねて、間違えれば即、地獄行きのハードルをくぐりぬけて会得したものです。この神様が創ったとしか思えない仕組みを理解し解き明かして、人間に利用していくのですから奥が深く興味深いわけです。3年生になったら一緒に雄しべと雌しべの世界、いや、畜産の研究をしましょう。

大学の仕事はとてもやりがいのあるものと思います。僕は市役所にいました。就職当時のことを思い出せば、皆さんが言う「おいしい人生は楽なこと」みたいな考えがあったのも否定できません。もちろん衛生監視員として任用されましたので、研究や論文とは別の仕事が本業でした。担当事業に役立てようと農業公園（テーマパーク）に併設してあった実験室で実験しました。高価な機械で難解な実験（当時は、そのように感じていました）をしていた大学時代とはうって変わり、現場の中に即役立つ研究をテーマにしました。勉強不足だった？僕には実験の結果が即、現場で生かされていくこの研究に猛烈にはまりました。役所では当時グローバライゼーションという言葉がはやっていました。「地元で農産物などつくる必要は無くなった」「中国やアジアから買えばいい」というスローガンで国際貿易センターなどを建設して上海や長江流域の公社と仲良くなろうと一生懸命でした。今でいう農薬の残留や自給率など口にする人は少数派でした。その間地元の農業者は激減し、特に畜産農家では12年間で半分にまで減りました。多くの農地はマンションに変わりましたし、その子弟は非農業職を選び、農村は高齢者ばかりという変貌を遂げました。ところが近年になると、安全、スローフードや地産地消が掛け声です。さっそく地元の農業にも何かをするのがブームになりま

した。農業は一部の先進的ない人たち（おそらく企業ベースならばこうゆう方が生き残るのでしょうが）を除き、生産技術、流通そして販売方法においても硬直化していました。しかし、残念なことに地域にどのような形態の農業が大切で、現場ではどこにメスを入れればよいのかという独自の案、現場に即応できる生産技術を持っている職員が殆どいませんでした。そこで、他の自治体と同じようにハウス、直売所、村の祭りのテントとかを国の補助金で建てるのが良い仕事でした。大学にきて明日の日本や農業を支える皆さんが実際に役立つ知識や技術を修得する手助けを出来ることに僕は大変な喜びと責任を感じています。

さて大学では何を学ぶべきでしょう?もっとも僕もまだ若輩者でそんな大それたことを論ずる資格は無いのですが、学部学生の皆には一般的な知識の獲得やちょっとした研究の他に大切なことがあるように思います。例えば、新聞をみて、議論の対象になっている事象について考えみましょう。イラク問題でも拉致問題でも自然災害でもかまいません。色々な新聞を読んでまったく違う内容、論調があることに気がついていますか?またその論調も非常に日和見であることにも気づくはずです。要するにたくさんある情報の中から本当に重要なことを診る訓練です。これは研究室の実験でもいえます。今はインターネットの時代ですから、興味を持った事情について検索すれば（もっとも専門の研究の場合は英語で調べてください）山盛り情報が得られます。何がわかっていないのか、何を調べればよいのか、自分の実験室の状況でどうしたら調べられるのかを考え実践するわけです。会社に入ってそこの職場で得られる材料と予算で高い評価の商品を作り出すことにも似ているでしょ。こうしたことには、ふんだんなお金と高価な機械で大研究をするよりも知恵と工夫がいる場合もあると思います。

最後に、農大に来て強く感じたことは、陽気で、真面目で、働き者で、礼儀正しい学生さんが多いことです。最後の3つの特質は実は今の若者に非常に欠けていることだと思います。この点を持ち合わせて社会に出て、他の人より少しだけ早く仕事すれば非常に大切にされると思います。人間、劇的に優秀な人は非常に少ししかいません。この少しだけ早くというのが味噌です。レポートの期限ぎりぎりになってバタバタする人が多いでしょう。まずレポートを、余裕を持って上司に渡しましょう（まあ実際は少し厳しいですが）。大切にされれば組織に愛着がわきます。卒業する学生さんは「あああ学生時代が終わりや」と情けないことをいいます。いやいや社会人になるのはすばらしいことです。給料を貰えます。社会的な信用も上がります。出世もしますし、大好きな人と暮らすことも養うことも出来るわけです。あと君たちの仕事で社会に貢献できます。いろいろな意味で生きていた証を残せるのです。虫なら子孫繁栄が生きていた証ですが、立派な子孫を育てその上、仕事でも残せればすばらしいことではないでしょうか。これでこそ人間でしょう。皆さんが社会に出てよい証を残していただければと思うわけです。その自己研鑽にもぜひ参加させてください、わたしもまだ半人前ですので。今年は酉年です洋々たる前途に飛び立って行ってください。ちなみに僕が研修をのぞいて会社で最初にした仕事は牛のウンコ拾いです、いや毎日ウンコでした。かっこいい仕事が待っていなくても腐らず、努力してください。正しい勇気をもって元気に一生懸命働けば、不遇なときがあっても必ず飛翔する時がくると信じています。

集う学友

畜産学科での日々

畜産学科　4年
矢野則維

現在、僕は卒業論文の実験等で忙しい毎日を送っています。大学に来ては畜舎に降り、データをとってはそれをまとめての繰り返し。最近この作業にはちょっと飽きてきてます(笑)しかし、この実験では、好きな事を自分のできる範囲でじっくりやれているので、最後にはとても満足のいく結果が得られるでしょう。また、そのために日々努力しています。研究テーマは「老齢去勢雄ニホンウズラのクロアカ腺におけるテストステロンの影響」という内容です。ですがこれだけで内容を分かってくれる人はいないでしょう。まぁ分かれと言うほうが無理です(苦笑)農学部、いや畜産学科内でも割と特殊な事をやっているのではないかと思います。それというのも所属している研究室が家畜繁殖学研究室ということで、内分泌・ホルモン系の事を主な実験テーマにしている研究室だからです。もちろん培養系や富士農場でウシを実験動物に実験を行っている人もいて、卒論はみんな様々です。その中で、自分は雄ウズラを用い、去勢後テストステロンという雄性ホルモンの投与を行って、クロアカ腺という生殖腺がどう変化するかの観察を行っています。地味な作業が続きます…。その分いいデータが取れればかなりうれしいんですけどみんな卒業のために大変です(笑)

家畜繁殖学研究室では、所属して早くも二年が経とうとしています。今思うとあっという間でした。僕らの頃は、希望の研究室に入るには、研究室に入るためだけの学力試験があり、各研究室の定員30名を希望者で争っていました。その定員中、試験の成績上位15名が優先的に入ることができ、残りの後半15名はくじ引きによる抽選だったため、希望の研究室に入るにはかなり運に左右されてしまうものでした。自分は何とかがんばって試験で…と言いたいところですが、結果16番目でしょっぱなのくじを引いてしまいました。まぁ入れたのでよかったのですが、あの時はずれを引いてしまっていたら今ごろどうなっていたか全然分かりません。今はカリキュラムも変わり、それまでの成績が加味されるシステムになったと聞いているので大変よいことだと思います。

また、この研究室では、今まで話したことも見たこともない人が多く、友達の輪がかなり広がったと思います。農大のいいところの一つは地方出身者が多く、全国に知り合いができることですね。例にもれず、研究室に入ってから、北海道から沖縄まで幅広く知り合いができました。しかも繁研は雰囲気もよく、このような仲間達に囲まれて貴重な時間を過ごせたことは大変喜ばしい事でした。これからもこの縁を大事にしていきたいですね。

しかし、大学に入学したての頃は標準語や初めての一人暮らしに慣れず、加えて大学生活が慌しく始まり、てんぱっていたような気がします。しかも、引っ越したアパートが込み入ったところにあり、当初は外出するたびに迷っていました(笑)ですが入学してすぐに友達もでき、出だしは好調でした。最初に知り合いになったのは現在飼養研のN君でした。これはアパートの部屋が隣でした(笑)入学式では早速新潟のW君とも知り合いになり、1年生ながらサークルまで作ってしまいました。フットサルサークル・モノスフィエスタの誕生です。この頃は、自分も含めて半分以上がサッカーボールもまともに蹴れないやつらばかりで随分練習しました。しかも今思うとみんなでかなりしっかりサークル活動と運営を行っていたように思います。あの頃はほんとに元気が有り余ってたし、若さがとりえだった懐かしい思い出です。授業もほとんどそいつらと一緒に和気藹々やってました。たまに苦労も多かったですが(笑)また、バリボーやネイチャーといった異なる分野でもサークル活動ができ、たくさんの仲間に出会い、迷惑ばかりかけてしまうこともありましたが大変充実した時を過ごせました。これからもそこで出会った人たちは忘れる事はないでしょう。

しかし、4年間という時間は長すぎて思い出すことが多すぎますね…。このような感じであっという間に大学生活は過ぎ去っていきました。今では後輩達を見ていて、卒論や就活など慌しい未来が待っていることを笑顔で応援する傍ら、まだまだ大学生活を満喫できるんだなぁという少しの寂しさを感じながら見守っています。苦しいながらも楽しかった時間はいつも以上に待ってはくれず過ぎ去ります。時がたつ寂しさを感じつつも過去は思い出として一歩づつ前進していき、これからも、今までのようにあっという間に時が過ぎ去っていけるよう日々努力していきたいと思います。

最後にはなりますが、今日まで自分を支え、ともに喜びを分かちあってくれた皆様、大変楽しい時間を過ごさせていただき満足しています。これからも皆様の活躍と健闘を願い、終わりとさせていただきます。本当にありがとうございました。



一期一会

畜産学科　3年
中西　祐美子

畜産学科3年。これほど3年生になれた事を嬉しいと感じる人はそれほどいないのではないでしょうか。私はこの厚木キャンパスに来て、まだ1年しか経っていません。3年生なのになぜ1年しか?と思われるかもしれませんが、それは私が編入生だからです。私は3年前、東京農業大学短期大学部に入学しました。1年の頃は編入の事など考えてもいませんでしたが、2年生になってこれからの事を考え始めた時に、もっと色々畜産について学びたいと思い畜産学科の編入を決めました。編入の合格が決まってからは、厚木での生活について不安な事も気持ちの中にはありましたが、むしろ期待に胸膨らませている事の方が多かったように思われます。しかし現実はそんな期待しているようなものではありませんでした。厚木の事はまったくわからないし、授業数はアホほど多い。一番辛かったのが周りに知っている人がいなかった事です。知っている人といえば同じ編入生の数十人ほどでした。授業を受けていても身に入らないし、学校が終わったらすぐ家に帰るだけ。あの時ほど生活を苦痛に感じた事はなかったし、学校をやめたいと思った事はありませんでした。しかしこんな苦しい学校生活を変えたのが研究室でした。私は家畜衛生学研究室に入ったのですが、やっぱり最初の頃はきつかったです。3年生ともなればお互い話をした事がなくても顔は知っていたりする一方、自分だけ誰も知らないというすごい孤独感にも襲われました。しかし今はあの孤独感がウソなぐらいみんな色々話かけてきてくれるし、実験や検査にも慣れてきて研究室での生活が楽しくなりました。前までは「編入生だから」という固定概念があったので、みんなの前で自分の意見が言いづらく悩んだ時もありました。しかしみんなが特別な扱いではなく普通に私の事を受け入れてくれているとわかった時、こんな事を考えている自分が情けなく、みんなに対して失礼だと思いました。辛い時、ひどく落ち込んだ時には声をかけてくれて相談にのってくれる友達もできました。みんなが私の事を受け入れてくれた分、私がみんなに対し貢献できる事は私の持ち前の明るさを生かし楽しい学校生活を送る事だと思いますし、その事でみんなが笑顔でいられるような雰囲気を作っていく事ができればと思っています。

後1年しか農大にはいられませんが、何事にも後悔だけはしないよう、明朗快活、充実した学生生活を送っていきたいと思っています。

世界学生サミット
(International Student Summit)

畜産学科　2年
矢野　見佳

初めに、1年生のみなさんご入学おめでとうございます。皆さんの素敵な農大ライフに期待しています!さて突然ですが、新入生・在校生のみなさん、農大は海外の素晴らしい大学18校と姉妹校関係にあるのをご存知ですか?また、その素晴らしい姉妹校の方々が年に一度、世界学生サミットを機会に来日するのをご存知ですか?世界学生サミットは、毎年決まったテーマにそって、姉妹校を代表する学生達が熱い発表・熱い討論を行う場であります。これは世界学生サミットが開かれる2日間だけのことではありません!姉妹校の学生達は、来日してからの1週間、ほぼ毎日「これからの農業」「学生の役割」などを多くのことを英語で議論し合っていました。私は今年初めて参加して、この1週間に、悔しい、楽しい・・本当に多くの思いや感情を短期間に体験しました。まるで嵐でした・・。

これくらいでは、まだまだ世界学生サミットを語りつくせませんが、語りつくす前に、ISFのことを語りたいと思います。ISFとは、世界学生サミットを1つの目標とした団体です(これは、私のISFに対する考えであり、各ISFメンバーによりISFに対する考えは異なります。)ISF-JAPANは、世田谷・厚木・オホーツクキャンパスから結成されます。去年の厚木ISFでは、一年を通して、勉強会・農業実習・エコリサイクルセンターと食品加工センターの見学・タイ、中国、台湾からの短期留学生との交流、食文化交流会など、多くの体験をしてきました。また、世田谷ISFのメンバーとも、色々なISFイベントを通して、サミット開催に向けて協力して来ました。去年は農大に限らず、他大学からの学生の参加もありました。今、各姉妹校では、ISF設立に向けて活動真っ最中です。そして、実際にペルーでは設立されています。私はISF・ISS(サミット)を通して、本当に多くのことを、体験でき、知ることが出来ました。これは、周りの方々のおかげです。もし、これ読んでISF・ISSに興味が出た方は、試しにISFイベントに参加してみてください。

一年を振り返って

畜産学科　1年
割野　孝太朗

「應援團に入団すれば絶対充実した四年間が過ごせる！農大が好きになれる！」。この言葉で入団する事を決心した四月からもうすぐ一年が経とうとしています。本当に充実した一年が過ごせました。

この一年、苦しかったこと、悲しかったこと、楽しかったこと、本当にたくさんの思い出を得ることができ、またその思い出を分かち合える仲間もできました。應援團は大変厳しい団体です。楽しいこと、嬉しいこと以上に辛いこと、苦しいことがあります。それでも私が應援團員でいるのは、応援している選手が勝った時の嬉しさ、リーダー公開後の達成感、又、辛い事も仲間がいて私を支えてくれたからだと思います。

私は本当に良い仲間と出会えました。今までのなあなあでやってきた友達とは違い、本気でぶつかり、心から信頼できる仲間です。しかし、最初からこのような関係だったわけではなく、喧嘩もしました。（こいつとは合わねぇ～）と何度も思いました。それでも協力しなければ仕事も成り立ちませんし、活動も絶対失敗します。このように喧嘩しつつも協力していく内に段々仲良くなっていき信頼関係も生まれてきました。この一年でこれほどの仲間ができたのも東京農業大學全學應援團に入団したからで、普通の生活を送っていたら多分できなかったと思います。これからも様々なことがあると思いますが、仲間と力を合わせて頑張っていきたいです。

最後に私を何度も助けてくれた仲間に感謝したいです。

平成16年度畜友会事業報告

平成16年6月1日～平成17年5月31日

平成16年

5月31日～6月5日	厚木キャンパススポーツ大会参加
8月2日	1年生対象収穫祭説明会（於 富士畜産農場）
10月4日	平成16年度畜友会定期総会（於 トリニティホール）
10月6日	第5回厚木キャンパス収穫祭　及び 第113回体育祭畜産学科統一本部本部開き （於 食堂・けやき）
10月29日	第5回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加
10月30日～31日	第5回厚木キャンパス収穫祭参加 （家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊）
11月2日	第113回体育祭参加（於 世田谷キャンパス）
11月16日	第5回厚木キャンパス収穫祭　及び 第113回体育祭畜産学科統一本部慰労会 （於 食堂・けやき）

平成17年

3月20日	畜友会誌「ふじみの」41号発行
3月21日	卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
4月上旬	新入生学外オリエンテーション参加
4月下旬	新入生歓迎会（於　食堂・けやき）

特別会計収支決算報告

平成15年6月1日～平成16年5月31日

第4回厚木キャンパス収穫祭

収入の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額
一般会計より	1,030,000	1,030,000	0
雑収入	0	0	0
当期収入合計（A）	1,030,000	1,030,000	0
前期繰越収支差額	337,773	337,773	0
収入合計（B）	1,367,773	1,367,773	0

支出の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額
統一本部	730,000	683,437	46,563
特別企画	50,000	49,197	803
体育祭	100,000	99,705	295
宣伝隊	150,000	115,534	34,466
装飾	50,000	41,061	8,939
家畜苑	150,000	127,294	22,706
予備費	45,000	0	45,000
当期支出合計（C）	1,275,000	1,116,228	158,772
当期収支（A）－（C）	△245,000	86,228	△158,772
次期繰越収支差額(B)－(C)	92,773	251,545	△158,772

上記のとおり報告する。
平成16年9月11日

畜友会会長　栗原良雄 ㊞

上記に相違ないことを認める。
平成16年9月24日

平成15年畜友会監査委員
松岡昭善　門司恭典
飯塚さやか　三浦隆雄

監査報告書

畜友会会則第９章、第29条及び30条の規定に基づいて平成16年9月24日に平成15年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告書、会計諸帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

平成１５年度収支決算報告

平成15年6月1日～平成16年5月31日

一般会計の部

収入の部　（単位：円）

科目		予算額	決算額	差額	備考
会費	新入生	2,000,000	800,000	1,200,000	10,000×79名 5,000×2名
	編入生	37,500	15,000	22,500	5,000×3
	過年度分	1,300,000	450,000	850,000	10,000×220
雑収入		0	0	0	
当期収入合計(A)		3,337,500	1,265,000	2,072,500	
前期繰越収支差額		2,176,510	2,176,510	0	
収入合計(B)		5,514,010	3,441,510	2,072,500	

支出の部　（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額	備考
収穫祭援助費	1,030,000	1,030,000	0	特別会計に繰り出し
ふじみの印刷費	430,000	428,610	1,390	1400部発行
卒業祝賀会費	200,000	190,110	9,890	
卒業記念品費	400,000	245,700	154,300	290個製作
新入生歓迎会費	150,000	143,376	6,624	
消耗品費	50,000	23,368	26,632	
通信運搬費	150,000	58,015	91,985	
雑費	70,000	64,750	5,250	
予備費	230,000	0	230,000	
使途不明金	0	65,358	△65,358	
当期支出合計(C)	2,710,000	2,249,287	460,713	
当期収支差額(A)-(C)	627,500	△984,287	1,611,787	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,804,010	※）1,192,223	1,611,787	

※）残高証明

郵便局	1,180,767
三井住友銀行	11,456
合計	1,192,223

使途不明金について

今年度、通帳残高と繰越金額を照合した結果、65,358円の不足が認められ、調査の結果、畜産学科が厚木に移転した平成11年度以前から本事象の生じていたことが判明した。平成16年度畜友会総会において使途不明金として処理することが了承された。

特別会計予算

平成16年6月1日～平成17年5月31日

第5回厚木キャンパス収穫祭

畜友会援助費

収入の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より	700,000	1,030,000	△330,000
雑収入	0	0	0
畜産学科助成金			
当期収入合計(A)	700,000	1,030,000	※1) △330,000
前期繰越収支差額	251,545	337,773	△86,228
収入合計(B)	951,545	1,367,773	△416,228

※1）昨年度、活動時に使用する法被を購入したためです。

支出の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
統一本部	400,000	730,000	※1) 330,000
特別企画	0	50,000	※2) 50,000
体育祭	70,000	100,000	△30,000
宣伝隊	150,000	150,000	0
装飾	50,000	50,000	0
家畜苑	130,000	150,000	△20,000
予備費	45,000	45,000	0
当期支出合計(C)	845,000	1,2750,000	△430,000
当期収支差額(A)-(C)	△145,000	△245,000	100,000
次期繰越収支差額(B)-(C)	106,545	92,773	13,772

※2）本年度の特別企画実行本部の予算内で活動するため、畜友会援助金はありません。

農友会厚木支部助成金

収入の部

（単位：円）

科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より			
雑収入			
畜産学科助成金	1,610,000	1,180,000	※1) 430,000
当期収入合計(A)	1,610,000	1,180,000	430,000
前期繰越収支差額			
収入合計(B)			

※1）本年度より、団結式等で世田谷キャンパスに行く交通費を助成金のほうに組み込むことになったためです。

内訳

（単位：円）

科目	第5回予算	第4回予算	第4回決算
学科助成金	計 630,000	200,000	346,973
神輿代	130,000		90,287
パネル代	100,000		
応援合戦衣装代	60,000		23,834
事務費	20,000		19,747
記録費	30,000		11,105
交通費	290,000		202,000
学内装飾費	計 180,000	180,000	155,788
家畜苑費	計 800,000	800,000	760,996
鋼管代	160,000		155,174
運搬代	380,000		369,495
装飾代	260,000		236,327
合計	1,610,000	1,180,000	1,263,757

平成16年度畜友会予算

平成16年6月1日～平成17年5月31日

一般会計予算（案）

収入の部

（単位：円）

科目		予算額	決算額	差額	備考
会費	新入生	2,000,000	2,000,000	0	
	編入生	92,500	37,500	55,000	※1）
	未収分	2,070,000	1,300,000	770,000	※2）
雑収入		0	0	0	
当期収入合計(A)		4,162,500	3,337,500	825,000	
前期繰越収支差額		1,192,223	2,176,510	△984,287	
収入合計(B)		5,354,723	5,514,010	△159,287	

※1）編入生 2年生‥‥7,500円×3人
3年生‥‥5,000円×12人
4年生‥‥5,000円×2人

※2）1年生‥‥‥‥‥‥10,000円×144人
2年生‥‥‥‥‥‥10,000円×20人
3年生‥‥‥‥‥‥10,000円×30人
4年生‥‥‥‥‥‥10,000円×13人　計207人

支出の部

（単位：円）

科目	予算額	決算額	差額	備考
収穫祭援助費	700,000	1,030,000	△330,000	※3）
ふじみの印刷費	430,000	430,000	0	
卒業祝賀会費	200,000	200,000	0	
卒業記念品費	400,000	400,000	0	
新入生歓迎会費	150,000	150,000	0	
消耗品費	50,000	50,000	0	
通信運搬費	150,000	150,000	0	
雑費	70,000	70,000	0	
予備費	230,000	230,000	0	
当期支出合計(C)	2,380,000	2,710,000	△330,000	
当期収支差額(A)-(C)	1,782,500	627,500	1,155,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,974,723	2,804,010	170,713	

※3）昨年度、活動時に使用する法被を購入したためです。

平成16年度畜友会役員

平成16年6月1日～平成17年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	栗原良雄	家畜飼養学研究室
副会長	吉田豊	家畜生理学研究室
副会長	渡邊忠男	家畜衛生学研究室

・執行委員

委員長	3年	岡部健典	家畜繁殖学研究室
副委員長	3年	新海義人	家畜育種学研究室
	2年	小林大樹	
書記	3年	吉田佑美	家畜育種学研究室
	2年	菅澤奈充子	
会計	3年	小山智美	家畜繁殖学研究室
	2年	林亜希子	
渉外	3年	川口桂介	家畜育種学研究室
	2年	橋本真里奈	
企画	3年	五島惟道	家畜繁殖学研究室
	2年	鈴木瑞穂	
庶務	3年	大原賢二	家畜繁殖学研究室
	2年	坂口陽祐	
編集	3年	横山祥子	家畜生理学研究室
	2年	関綾乃	
監事		松岡昭善	畜産物利用学研究室
		門司恭典	家畜繁殖学研究室
	3年	三浦隆雄	家畜育種学研究室
	2年	金井俊憲	

第五回厚木キャンパス収穫祭・第一一三回体育祭事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第5回収穫祭での活動内容は、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動は先生方と連絡をとり、畜産学科統一本部の各部門及び第5回厚木キャンパス収穫祭実行本部、農学科統一本部、そして世田谷キャンパス13学科統一本部と連絡を取り、また畜産学科統一本部をまとめ5回目となる厚木キャンパス収穫祭、第113回体育祭を成功させようと最後まで努力しました。

本年度の収穫祭当日は、1日目は残念にも雨天となりましたが2日目は晴天となり昨年を越える来場者を数え、皆様のご協力のもと無事成功させることができました。

来年度は第5回という節目を終え、新たに第6回を迎えるにあたり新メンバーにより新しい目標に向かって皆と一致団結して活動していきたいと思います。



特別企画

今年も去年同様、地域密着型のテーマの基、年齢の壁を取り払い、多くの学生や地域の方々に参加していただけるステージを企画・運営しました。

厚木キャンパス収穫祭5周年企画として教職員と学生が力を合わせて豪華商品を狙う『5周年だよ！全員集合』をはじめ、今年新たに学生の中からスターを発掘する企画『農大☆スター誕生』、その場にいた人全員が参加できる『DRAGON BOXZ』といった企画も生まれました。

また、毎年恒例となった『陽気な牧場の歌謡祭』では美声や工夫をこらしたステージで競い、子供に大人気だった『バルーン教室』や、家族で豪華商品を狙う『幸せ農大家族計画』、その場に居た全員が回答者である『クイズアグリアワー』では学生以外にも多くの人に参加していただきました。

さらに定番の、模擬店等のコマーシャル時間を競う企画『ステ☆コマ』や、多くのカップルをつくった『恋愛成就　農大大明神』では予想以上の参加人数を集めました。

そして、毎年根強い人気とともに大盛り上がりを見せる『リーダー公開』など、収穫祭1日目は雨のため体育館で行われたが大勢の人に見てもらうことができました。



宣伝隊

東京農業大学厚木キャンパス収穫祭の知名度も高くなってきている中、今年も収穫祭に多くの方々を迎えるためいろいろな場所で宣伝活動を行ってきました。

宣伝活動では、農大マークと大根と鮎柄の白色の浴衣にエンジ色の法被を身にまとい足下は足袋を履き、大きな声と満点の笑顔で収穫祭の楽しさを伝えます。8月のあつぎ鮎まつりDANBEパレードは団扇の配布や農大名物の青山ほとりを行い、9月下旬から収穫祭当日までは土日を利用し、本厚木、愛甲石田駅等の駅前、厚木市内の公園や各地域のお祭り会場等へ行き、宣伝用のビラ・野菜・花の種・風船・マグネットを配布し全學應援團によるリーダー公開を行ってきました。10月に厚木の一番街で行った厚木パレードでは、9月下旬から作り始めた畜産学科伝統の神輿を担ぎ、揃いの衣装で錬り歩きました。この神輿には作り手の様々な思いが込められています。また収穫祭当日は、ちびっ子お絵かきコンテスト、野菜の無料配布を行う等の活動の結果、昨年以上の来場者を迎えることができました。





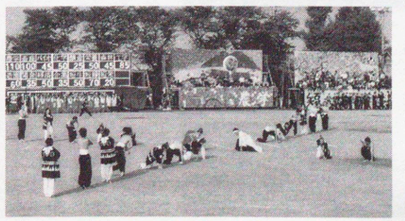
体育祭

体育祭は、毎年世田谷キャンパスで行われ、15学科対抗で玉入れ、綱引き、大玉転がしなど様々な競技を競い合います。厚木キャンパスからもたくさんの学生が参加し楽しく盛り上がります。皆どの競技も「他学科には負けまい！」と常に1位を目指しています。その気迫があるためか、畜産学科は毎年競技の部では上位にランクインしています。

また競技の部の他にも応援の部というものがあります。これは、各学科で応援合戦を考えお互いの学科を応援し合うものです。これも15学科対抗の競技の一部であるため、毎年畜産学科では応援合戦には特に力を入れて本番に向け完璧にするために毎日のように練習します。そのため本番が終わると、結果はどうあれ全員の心が一つになれたことにとても感動します。また、他学科のものを見て楽しむこともできます。

今年も畜産学科らしい戦いぶりを発揮できたと思います。





櫓装飾

「櫓」とは、毎年世田谷キャンパスで行われる体育祭での各学科の応援席のようなものです。ベニヤ板30枚分に描いた大きな絵を、金属のパイプで高さ約5ｍ50㎝、横幅約9ｍ、奥行き約3ｍの大きさに組み立てたものに設置します。

今年は絵から飛び出していく8頭の虹色に輝く馬をつくり、櫓装飾の部で15学科中3位に入賞することができました。とても大きいので図案から実物大にするのが大変でしたが、他部門のみんなにも支えられ、とても良い作品が出来上がりました。



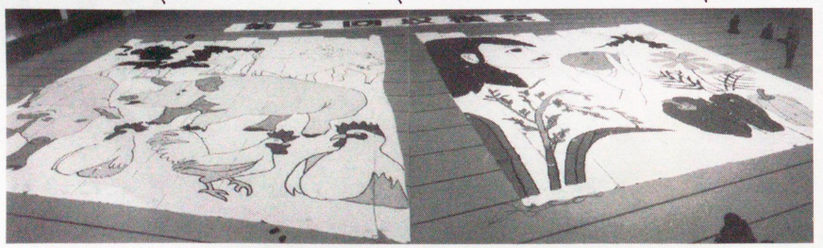
研究棟アート

研究棟アートとは、文化会館や大学が見える道路などからはっきり見えるほどの大きな絵を研究棟の壁一面に装飾することです。そして、多くの人に農大収穫祭を知らせる役割をするものです。

今年は、風の抵抗や、布を運びやすくすること、片付けのしやすさなどを考え、白い布に描くことにしました。1本を縦15ｍ×横1ｍにし、それを13本つなげて、縦15ｍ×横13ｍの一つの絵に仕上げました。

作業は、9月の終わりから開始し、10月の半ばからペンキを塗り始め、たくさんの人に手伝っていただき、前夜祭の前の日に研究棟に装飾しました。

農学科の絵には、人、野菜（ピーマン）、果物（オレンジ）、花（コスモス）、昆虫（チョウ）、イネと、農業に関するもの、畜産学科の絵には、ウシ、ブタ、ヤギ、ニワトリと、畜産業に関する動物を描きました。



家畜苑

「家畜苑とは?」こう言われて、一般の方に解るように一言で簡単に説明するならば、「小さな動物園」という言葉が一番理解して貰い易い言い方ではないだろうか。しかし、私が家畜苑という場で提供したいモノは、その簡単な言葉では足りないのである。

収穫祭に来て下さる方は老若男女であるが、家畜苑に来て下さる方は比較的に子供が多い。普段、目にする事が出来ない「動物」とふれあう事が出来る貴重な機会だと思うし、子供達に命というモノをリアルに感じ考えさせる場として大事な役割を果たしていると思う。ヒヨコとふれあえる場というのも提供しているが、そこでの子供達を見ているとまるでオモチャの様にヒヨコを扱う子供が多く、私達とのやりとりで命というモノを少しは理解して貰えたと思う。

だが、そこで思考を停止させてしまっては他の普通の動物園でも得る事の出来る体験であり、農大の畜産学科が行う意義が半減してしまうと思う。私達が提供している場にいるのは、動物であると同時に家畜なのである。現在では、ペットも愛玩動物・伴侶動物という分野づけされ家畜の一種として考えられているが、勿論ペットでもない。産業動物としての家畜なのである。鶏なら卵を、肉を採るためであり乳牛なら乳を、肉牛・豚なら肉を産み出すためだけに生かされている存在なのである。普段何気なく口にしているそれらの生産の現場までを理解とまではいかなくても、考えるきっかけになって貰える場を提供しているのが家畜苑なのである。

家畜苑に来てくれる方には子供が多い。しかし、ただ可愛いだけの動物ではなく、「家畜」としての動物とふれあえる場として、子供だけでなく万人に訪れて頂き、貴重な体験をして貰いたいと思う。

【結果発表】

体育祭

総合順位……準優勝

競技の部……第2位

台風の目……第1位

大玉転がし……第2位

先生頑張って……第2位

各学科対抗リレー（男子の部）…第3位

（女子の部）…第2位

櫓装飾の部……第3位

応援の部……第7位

東京農業大学農学部畜産学科
“畜友会”会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発刊
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員ならびに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会　長　1名
(2)副会長　2名
(3)執行委員
委員長　1名
副委員長　2名
書記　2名
会計　2名
渉外　2名
企画　2名
庶務　2名
編集　2名
監事　4名

第七条　(1)会長は会を代表し、会務を総理する。
副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。
また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。
副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条　(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条　役員および連絡委員の選出および任期
(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。
副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。
(2)執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。
尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。
(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。
(4)連絡委員は、各学科〔1、2年次〕および各研究室〔3、4年次〕で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章　総会

第十条　(1)総会は定期総会とする。
(2)総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。
(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。
(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条　総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条　(1)総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。
(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。
委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。
(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条　定期総会は次の事項を決議する。
①前年度の事業報告および収支決算報告
②次年度の役員
③次年度の事業計画および収支予算
④会則の改正
⑤その他

第十四条　総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条　議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条　総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章　執行委員会および連絡委員会

第十八条　(1)第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条　執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条　執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条　執行委員会で議決された事項について、委員長および副会長に文章で必ず報告する。連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。

①執行委員会で決定した事項の伝達。

②一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三条　本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章　会計

第二十四条　本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてる。但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条　(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

(2)会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条　(1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条　(1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。

(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを試行する。

畜友会収穫祭内規

第一章　目的

第一条　本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条　収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条および第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章　組織および役員

第三条　収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

1、統一本部
2、宣伝隊実行本部
3、特別企画実行本部
4、学内装飾実行本部
5、家畜苑実行本部
6、体育祭実行本部

第四条　実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長	1名
副会長	2名
統一本部顧問	若干名
統一本部委員長	1名
統一本部副委員長	1名
統一本部会計	1名
各実行本部顧問	若干名
各実行本部責任者	各1名
各実行本部副責任者	各1名
各実行本部会計	各1名

第五条　(1)会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。
(3)統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。
(4)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条　(1)会長は会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときはこれを代理する。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(3)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。
(4)各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者と協力して円滑な運営・実施にあたる。

第七条　実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。
(1)6本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。
(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

第三章　会計

第八条　収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条　予算は畜友会執行委員会で編成し畜友会定期総会で承認を得る。

第十条　会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条　決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章付　則

第十二条　本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

第十三条　本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

各部門委員長より

Priceless

統一本部委員長
3年　岡部健典

まるで夢のような日々だった…

一年生の時に初めて統一本部に参加し、いつのまにか統一本部委員長を勤めていた。一年生の時は何も考えず自分勝手に行動し、二年生の副統一委員長の時は自分の弱さから統一本部を辞めようとも何度も考え、三年生、統一本部として最後の年には責任やプレッシャーは勿論あった。けれど、最高に楽しかった。最高だった。

全国どこの大学生もが、大学生活の中で学園祭を盛り上げようと必死になってやっているのだろう。農大の収穫祭も僕ら統一本部だけでなく、研究室やサークル、または有志や農友会、実行委員会が多くのお客さんを呼ぼう、知ってもらおう、そして何より楽しんでもらおうとするのだろう。そんな収穫祭は、僕ら統一本部が一年の中で最も輝けて、最も濃い時間を過ごせる時でもあります。毎日毎日作業をし、終夜が続く。プライベートなんてあったもんじゃない。けれど、そんな時間の中で楽しく笑ったり、口論になったり、ちょっと怒られたりと色々なことを学んだ気がします。三年間を通じて、すごく充実してたと思う。少しは輝けたかなって思います。統一本部としての活動は、三年間合わせても僅かです。けれど、その中でのみんなと過ごした時間、喜怒哀楽は記憶の中で色あせることはないだろう。統一にいれて本当によかった。



厚木キャンパスの収穫祭も節目の第五回を数え、まだまだ様々な可能性を秘めています。六回、七回となるにつれて、どう収穫祭が変わっていくのかが楽しみです。収穫祭への情熱と、収穫祭を愛する心があれば必ず素晴らしいものになるでしょう。

最後になりましたが、頼りのない自分を支えてくれた三年生（ｗｉｔｈゴレンジャー）、二年生、一年生ありがとう。また、先生、先輩をはじめ畜産学科統一本部に御協力頂いた全ての皆様に感謝いたします。

人×人

特別企画委員長
3年　五島惟道

毎日があわただしくて、一日一日がすごく大事で、怒ったり泣いたり笑ったり、あの頃は収穫祭が終わったら何しようなんていつも考えていたけど、いざ終わっちゃうと同じ研究室の畜友仲間ですらなかなか会えなかったりします。収穫祭が終わってから今日までなんだかあっという間に過ぎてきて、まるであの頃のことは夢だったんじゃないかなって…初めて第5回収穫祭特別企画本部のメンバーで会議をしたのはかれこれもう1年以上前の話だね！ほとんどの人が、部門がまだはっきり第5回収穫祭について意識する前からウチらトッキーズは活動していたよね!?先輩から委員長法被を受け継いだときから思い描いていた収穫祭より何倍も何十倍もすばらしいものが出来上がったって思います。自分を支えてくれたすべての人に感謝します。そして何より横山祥子、脇田友紀子、鈴木瑞穂、このメンバーでステージを作り上げることができたこと、きっと一生忘れることのできない大切な思い出になったなって思います。いろいろ頼りなかったと思うけど最後までついてきてくれてありがとう。

畜産学科特別企画ってなにげなく口にして、仕事して、自分と横山は引退を迎えることができたけれども、ホントは畜産学科に特別企画が存在していることはすごいことなんです。今年の畜特企メンバーは自分を含めみんな2年生で特企に触れて、先輩に教わりながら作業して、先輩にわざわざ許可とったりスケジュールに合わせたりするのってわずらわしく感じることもあるけれどそれってすごい贅沢な悩みなんだよね。陽子さんと真希さんは2年のときたった2人で特企つくって、その時畜産学科に特企は必要ないんじゃないかって話が出たそうです。今特企って役職が存在してるのは先輩ががんばってくれたからで、無事第5回収穫祭を終えることができたのは今年のメンバーががんばった証だって思います。自分は過去から未来へ特企を伝えることができてとても幸せだなって感じています。特企は特にだけど収穫祭は人とのつながりを学ぶ大事なイベントだなって思います。役職とか委員長とかってただの肩書きだと思います（実際横山と2人で委員長やった感じだし、手伝ってくれた人や参加してくれた人はみんな特企だって思います☆）。だから来年もけんかこそすれ、幸せだなって思える収穫祭作りを目指してほしいです。

脇田友紀子、鈴木瑞穂へ。2人にはホント感謝しているよ!!特別企画って役職に新しい可能性を見出してくれたね!!来年は今年すばらしい物を作ったっていう「自信」と3年として特企を引っ張っていくという「責任」、そして自分の「プライド」を持ってすてきな収穫祭を作ってください。

横山祥子へ。横山はホント不思議な縁があるね!!わがままで感情の起伏が激しいまるまる1個下のあつかいは大変

だったでしょう!?でも一番気持ちわかってくれてて感謝しています。チーム組めてよかったよ!!

最後になりますが、第5回収穫祭特別企画本部を支えていただいた参与の先生方、並びに収穫祭実行各本部、農友会各部の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。



宣伝隊！

宣伝隊隊長
3年　吉田佑美

宣伝隊はより多くの方に収穫祭に来ていただくために各地でビラ、野菜、種子、今年は新しくマグネットを作り配ったり、応援団の方に依頼して大根踊り等を公開していただいたり、時には自分達で大根踊りを行います。宣伝隊の根本は「農大生らしく」です。先輩方から受け継いだこの言葉を大切にし、そこに今年の宣伝隊らしさを加えて宣伝活動を行ってきました。宣伝隊は農大マーク入りの浴衣の上に農大と書いた法被を着て宣伝活動をするため、ある意味農大代表です。私はこの浴衣と法被が大好きだし、誇りに思っています。

今年は11回の宣伝活動を行いました。活動は6月末から収穫祭まで行いますが、それに至るまでに多くの会議をこなし、隊員同士言い合うこともありました。でもそれは一人一人がよりよい活動を行いたいという気持ちがあるからです。中でも私達宣伝隊にとって一番大変だったのは今年初めて行う厚木パレードでした。一番街の方、農友会各部の方に参加、手伝っていただいたり多くの方々にご協力していただいたので成功したと思います。そんな活動が報われたのか、収穫祭当日一人のお客さんに私達の配ったビラを見て初めて収穫祭に来たと言っていただいて本当に宣伝隊でよかったと思いました。こんなにいい思い出が作れたのも中村隊長を始めとする宣伝隊のみんなのおかげです。栗ちゃん、九里、イー君、忍、知世、哲、綾乃。ありがとう。綾乃、来年は知世と二人で自分のやりたいことをやってね。綾乃なら大丈夫！　また、岡部を始めとする畜産学科統一本部の皆と一緒でよかった。本当にありがとう。中でも神輿のミウとまっちゃんにはいろいろ迷惑かけてごめんね。本当にすごい神輿だったし、衣装もすごかった。本当にありがとう。



最後になりましたが第五回収穫祭宣伝隊を支えていただいた宣伝隊本部本部長の市村先生を始めとする参与の先生方、並びに収穫祭実行本部、農友会各部の皆さんにこの場をおかりして御礼申し上げます。

秋の幻

神輿隊長
3年　三浦隆雄

世田谷のグランドが夕闇に包まれ始めた晩秋のとき――

ピー、ピー、ピッピ（ピッピ）――神輿と共に担がれ、最後の時間を楽しんだ。八月の暑さ、まだ形にならない神輿、そして、あのグランドを駆け抜けることを夢見たことを思い出し――

昨年、一昨年と、自分にとってとてもすばらしい神輿で、そのような神輿に少しでも近づけたい、という想いがあった。それと自分の色をどうするか。と、試行錯誤の中、梅さんパーティーに出席する機会があった。その中で、一昨年より前の神輿の写真を見ることができた。自分の色は「畜産の収穫」にしようと決めた。「畜産の収穫」＝「生の収穫」。つまり、動物たちの命を収穫し、実験や研究をしてきたのだから、その動物たちのために神輿を作ってもいいのではないか？というのが自分の答えだった。

この想いを秘め、作り始めた神輿の作成は、思っていたよりも順調に進み、形になってくると、次第に手伝ってくれる仲間も増えていった。この仲間にも毎日毎日感謝の気持ちでいっぱいであった。向かいの作業場で作成していた農学科とも一緒に、初めて行われる厚木パレードを成功させようと、切磋琢磨な関係を気づけたこともありがたかっ

た。そして、他部門が本格的に作業を始めた頃。完成式を迎えることができた。「今年は、三年生全員で」という声があったため、全員で完成式を行うことが出来た。神輿は、大勢の仲間に囲まれ、ストロボの光が途絶えることはなかった。しかし、神輿の完成式は「今年の神輿」の完成ではなかった。

厚木パレード当日、厚木の空は畜産の神輿を映やした。また、まっちゃん（松本　直樹）が作った衣装は神輿を栄えさせた。このとき「完成した」と実感を持てた。知らない人もいると思うが、まっちゃんは朝8時には学科室に来てひたすら衣装を作っていた。男女人数分以上を一人で。「神輿」は神輿本体だけで完成でなく、担ぎ手の衣装の成功があってこそだったと、まっちゃんには大変感謝している。また、今年神輿という部門に入ってきてくれた金井俊憲にも感謝したい。自分とまっちゃんから何度も怒られても、くじけず、頑張っていた。つぎは、一人で「神輿」を引っ張っていき、第二回厚木パレードを成功させてほしい。そして、神輿看板を作ってくれた岡部　健典。収穫祭中にもかかわらず、世田谷へ持っていくために看板を作ってくれた。役員紹介の内容もとてもよかった。岡部と酒を



飲みながら、「神輿看板、統一で作らないか?」と近い過去を懐かしく思い出し――――。

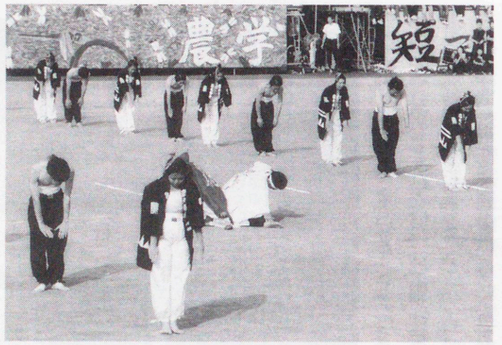
ピッピ（ピッピ）ピー――――。自分とまっちゃんは神輿を降りた。ファイアーストームに火が入り、神輿は自分の順番を待つ。自分たちの想いと炎の勢いが重なり合った瞬間、神輿は炎に優しく包まれた。炎の勢いが強くなるに連れて、自分の心に染み付いていくようであった。そして、神輿のお話はおしまい。

p・s　金井は膝をついて泣いていた……



畜産色

体育祭委員長
3年　川口　桂介



毎年、収穫祭の最後に世田谷キャンパスで体育祭が行われていることを皆さん知っていましたか?

多分、厚木キャンパスの学生のほとんどが体育祭を知らないと思います、知っていても参加したことない学生が多いでしょう。私たち畜産学科統一本部の体育祭役委員は体育祭本番の二ヶ月前から「応援合戦」という演舞や「広報活動」を本格的に始めました。その何ヶ月も前から世田谷キャンパスに行ったり会議をしたりもします。私たちは「どうしたら学生たちに知ってもらえるか?」「どうしたらたくさんの学生に体育祭に参加してもらえるか?」「どうすればみんなが楽しめるか?」それを考えながら活動していました・・・。

今年は九月からなんとなく例年より寒く感じ、収穫祭の準備もなかなか思うように進まない中、ほかの部門の手伝いをしながら応援合戦の練習を始めました。寒空の下二人きりの練習の日もあり、大勢での練習の日もあり、みんなでがんばりました。



今年の体育祭役委員は僕と二年生の女の子の二人きりでした。委員長の僕がしっかりしていなかったので後輩には迷惑ばかりかけていたと思います。後輩にしりをたたかれながらも何とか本番までこぎつけることができました。もちろん体育祭は学科対抗で、ここ二年同じ農学部の農学科に優勝を持っていかれてます。私たち畜産学科の今年度の成績は『準優勝』でした。成績こそ負けたものの畜産学科は他学科に無い団結力で学科一丸となって協力し合い、みんなで楽しく体育祭を満喫できました。

体育祭を終えて僕が感じたことは、学科全体で参加し、楽しむことが『畜産色』で畜産らしいと思います。だからもっともっと学生の皆さんに参加してもらって『畜産色』を濃いものにしていってほしいです。

みんな、ありがとう!!

櫓装飾委員長
3年　小山智美

農大には、他大学には余りない体育祭が存在する。世田谷キャンパスのグラウンドにて15学科対抗で行なわれるもので、各学科の出場者は選抜ではなく、出たい学生、先生が出るという形で行なわれる。その出場者をまず迎え、後は応援席・作戦場所となるのが私の担当した『櫓』である。

櫓の製作は土台の設計図はあるが、背面の装飾は各学科の担当者に任されている。おのおの好きなように描くが、ここで考慮しなければならないのが、体育祭の採点対象になっていることだ。配点が高いのであなどれない。準備作業期間約1ヶ月の闘いが始まった。

思えば、製作期間中いろいろあった。私は『櫓装飾委員長』という肩書きと共に、『畜友会　会計』という肩書きを持っていた。どちらもとても大事な仕事である。『櫓』は学科統一本部でやろうと決めた仕事。『会計は』任された仕事。不器用な私としては、両方を同時に進めることがかなり難しかった。どちらもおろそかにしたくなくて、夜も余り眠らず、どちらの仕事も続けた。しかし、やっていくうち、自分の悪い癖が出てしまった。今冷静に考えてみると、どうやっても1人では無理な仕事の量だったのに、皆も仕事があるのだからと手伝いを頼まず、「手伝おうか?」と言われても、断り続けた。それでうまくいけばよかったが、そんな筈もなく、追い込みに近づくにつれ、積もりに積もったツケが回ってきた。日毎に余裕がなくなり、仲間に八つ当たりしたこともあった。しかし、無理に進めようとする私を半ば強引に止め、両方がおろそかになっている現実を教えてくれて、「まずは櫓を完成させそのあとで会計をやる事、その間会計は自分が預かる」と委員長である岡部が自分の仕事があるのに引き受けてくれた。櫓のほうも、設置面で私よりはるかに詳しい家畜苑のメンバーと、ひと足早く担当する作業が終了した神輿のメンバーが相談にのってくれたし、作業のサポートをしてくれた。他のメンバーも、疲れているだろうに時間を割き手伝いに来てくれた。本当に感謝している。このメンバーでなければきっと挫折していただろうと思う。皆の協力で櫓が無事に完成し世田谷のグラウンドに設置し終わったときは、それまでの疲労がドッと来て脱力したし、何よりも達成できたことが嬉しかった。そのうえ、櫓装飾の部で3位という好成績を収める事ができた。最初はぴんと来なくてボーっとしていたら周りが「トモミが頑張ったから3位取れたんだよ!!」と言ってくれて初めて実感がわき、急に泣けてきて思わず号泣してしまった。



かなり仲間に迷惑をかけ引退したが、私は皆に何か残せたのだろうか?せめて迷惑をかけた分だけでも残せていたらいいなと思う。また、こんな私について頑張ってくれた後輩に教えてあげられたことは何かあるのだろうか?1つでもあればまぁ、私にしては上出来かと思う。そして同じ部門で一緒に櫓を作り上げてくれたまきとあっこ、ありがとう。正直二人も付いてくれるとは思ってなくてすごく嬉しかったです。辛かった時も二人のやりとりや、笑顔に助けられました。櫓頑張れ!!あなたたちなら作業中も楽しい部門になると思います。

そして最後に、畜産学科統一本部、たくさんの思い出をありがとう!!



☆装飾委員長☆

装飾委員長
3年　山口奈穂

一年前の体育祭の日、先輩から装飾の委員長法被を渡された。たった一枚の法被だったのに、その時のあたしには、正直かなり重かった。装飾の部門には、あたし一人しかいなくて、すべての責任があたしにのしかかり、大学内の一番大きな建物の研究棟の壁一面に装飾するという大きな仕事を任され、そのプレッシャーが、自分の気持ちよりもすごく大きかった。それだけ、委員長法被はあたしにとって、とても重かった。しばらくの間、悩んで、やめたい!と何度も思ったけれど、でも、先輩の法被を渡された以上、あたしがやるしかない!と思った。

今年は、去年とは大きく違い、一昨年使った布を使って装飾することにした。雨にも風にも負けないようにしようと、布を丈夫な物にし、設置も丈夫にした。昨年のブルーシートとは異なり、作業がしやすく予定通りに進んでいった。約1ヶ月間、ほとんど家に帰らず大学に泊まり、体育館の下で、毎日毎日極寒のなか次の日の朝まで、風邪を引きながらも作業していた。正直、この時期のあたしは、女を捨ててしまうぐらいヒドかった。でも、それぐらいあたしは、装飾という仕事に打ち込んでいた。

諦めずに最後まで取り組んだこと、また2年生の助けが

あったこと、そして、統一本部のみんなの助けがあって、収穫祭の3日間、初日に雨が降り不安だったが、無事収穫祭中ハプニングもなく、装飾することができました。

2年生から、この畜産学科統一本部に入り、右も左も分からないまま、装飾という部門にきた、まりな。あたしのわがままを素直に聞いてくれて、ついてきてくれて、ほんとぉにありがとぉ！来年は、今年よりも絶対に良いものができると思うから、頑張ってください。

のだちか、いつもあたしのすぐ後ろにいてくれて、あたしの相談にのってくれてありがとぉ！無理ばっかりさせちゃってごめんね。でも、本当に心から感謝しています。あの装飾が成功したのも、のだちかの助けがあったからだよ。来年は、2人で協力して頑張ってね。

そして、わがままばかりのこんなあたしを見捨てず、一緒にやってきてくれた、おかぺ、ごっち、しょーこ、ゆみ、てつ、みう、まっちゃん、けースけ、ともみ、ぱち、しんかい、もてちゃん、みやっち、まゆみ、ほんとぉーに、ありがとぉ☆楽しかったよっ★

最後になりましたが、顧問の西脇　充先生、野村　こう先生を始めとする諸先生方、林　甲さんを始めとする職員の皆様方、お忙しいところ親身になってアドバイスや設置等していただき、至らないことも多々ありご迷惑をおかけしたことと思いますが、本当にありがとうございました。





『家畜苑』ですごした日々

家畜苑委員長
3年　大　原　賢　二

収穫祭の1つの目玉でもある「家畜苑」。2年生のとき、自分がその部門の委員長になるとは思いませんでした。1年生のときは体育祭の応援合戦の練習だけに時間を費やし、家畜苑の一員に加わったのは2年生になってからでした。

2年生のとき、場所が移動したにもかかわらず3年生の先輩の多くのアイデアにより、家畜苑は大盛況でした。そして第5回の家畜苑委員長に自分が任命されました。とてもプレッシャーでした。



そして3年生。作業が順調にいくわけはありません。1つは天候。台風がよく関東のほうに来て、雨では作業が進まない家畜苑にとっては大きな痛手でした。予定では終夜作業はほとんどしないはずが・・・。そして家畜のほうにも大問題が。目玉でもある『タイソン（水牛・女の子）』が富士農場の縮小により収穫祭の前にはいなくなると言う話を聞かされました。自分は実はその時点で諦めていました。そのことを家畜苑メンバーに言った所、遅れたせいもあって大ブーイング。「委員長ならなんとかしろよ」と言う具合に文句を言われ、いろんな先生に頼み、農場縮小も遅れたせいもあってなんとか連れて来れることになりました。一安心でした。

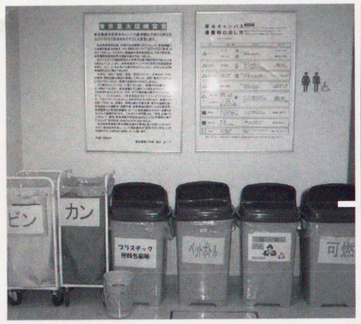
収穫祭初日。運がないというか、日ごろの行いが良くないというか、大雨で小屋は雨漏り・家畜が濡れるなど大慌てのうちに終わりました。2日目は曇りながらも雨は降らず、お客さんもたくさん来ていただき初日の鬱憤が晴れました。来ていただいた方々、ありがとうございました。次の日の片付けはやっぱり大雨でした。本当に雨が多かった年でした。



新海・宮川・茂木・真由美、家畜苑はどうだった？たくさん迷惑かけてごめんなさい。一時期は4人が敵に見えたときもあったけど最後はどの部門よりも最高のいい部門になったのではないでしょうか。宮川との喧嘩も今となればいい思い出よ。ほんとにお疲れ様でした。

2年生、よく短時間ですばらしい門を作ったね。あの時の3人の協力と他の部門の人への感謝を忘れず、史上最高の『家畜苑』を作り上げてください。

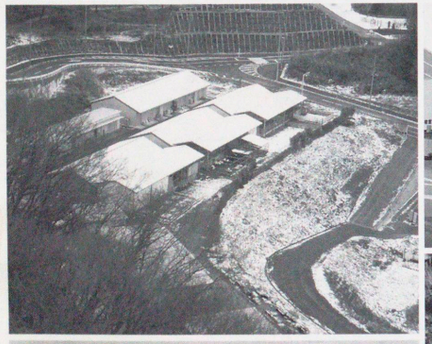
最後にご協力して下さった先生方・各研究室・富士農場の職員の方々・元練習生・統一本部のみんな・そして家畜たち、本当にありがとうございました。多大なご協力のおかげで無事に終わることができました。第6回収穫祭家畜苑もご協力よろしくお願いします。



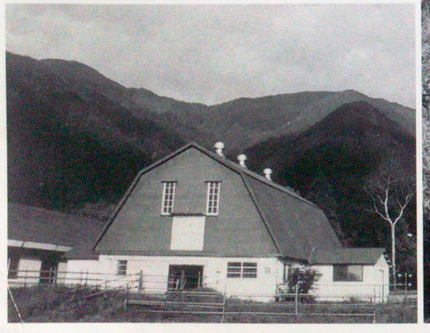














編集後記

「ふじみの」も今年で41号を発行することができました。平成10年に厚木へ農学部の移転が行われてから、厚木キャンパスでは農学部らしいほのぼのとした雰囲気がつくられ、部活動やサークルなどの課外活動も盛んに行われるようになってきました。

また、本年度は記念すべき第5回厚木キャンパス収穫祭を大成功に収めることができました。収穫祭1日目、雨にも関わらず多くの来場者を迎えられたことは、厚木の街に農大の名が浸透している証ではないでしょうか。

最後になりましたが、この1冊を発行するに当たり、お忙しい中原稿を書いて頂いた先生方、学生のみなさん、ならびに会員の方に深く御礼申し上げます。

この「ふじみの41号」が、今後畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

編集委員代表　横山祥子

平成17年3月20日　発行

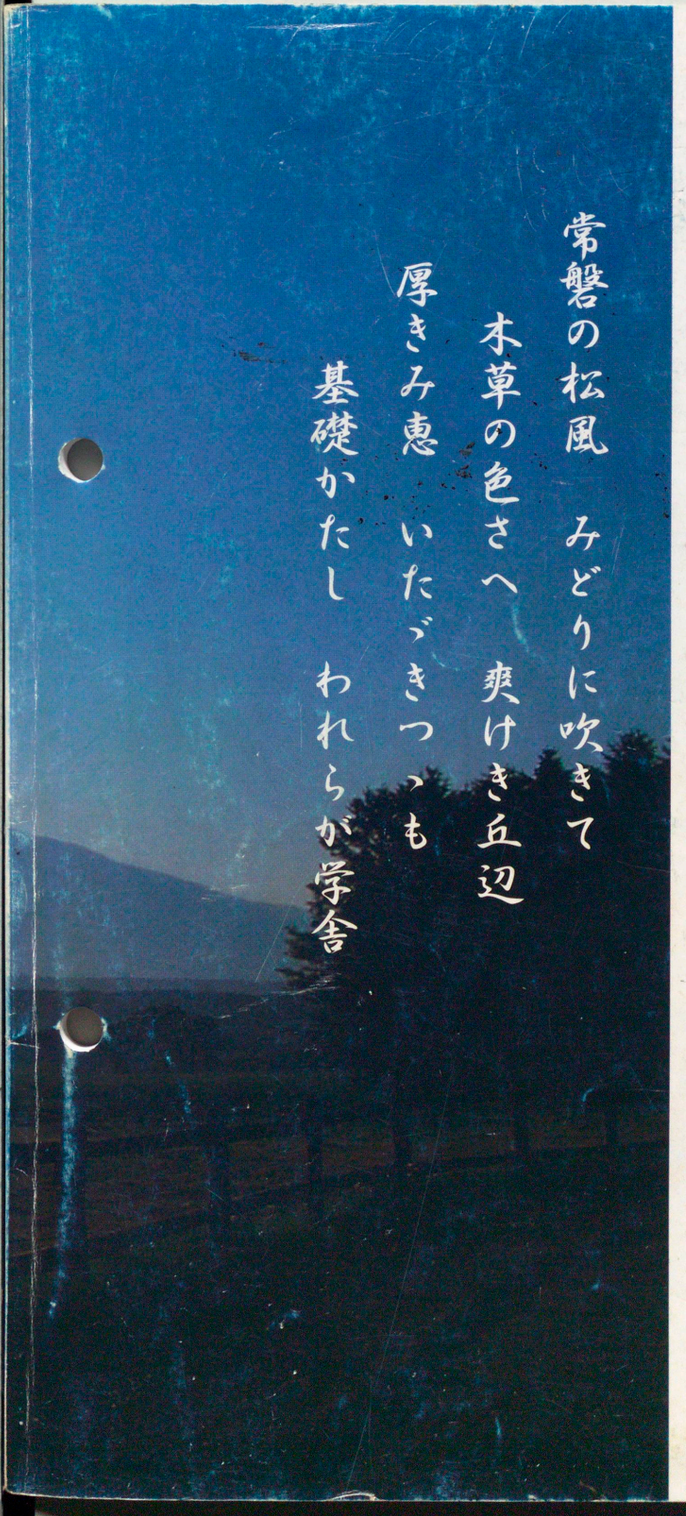
"ふじみの"第41号

ふじみの執行委員　横山祥子
山口奈穂
関綾乃

発行者　神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学畜友会
電話046(270)6228

印刷所　神奈川県厚木市栄町1-15-15
有限会社　藤野印刷所
電話046(221)3029

表紙の写真：旧富士畜産農場にて撮影



TOKYO NOUGYO DAIGAKU CHIKUSAN-GAKKA